

學界展望

二〇〇六年一月〜二〇〇六年十二月

● 哲 學

本年度も、哲學部門は廣島大學大學院文學研究科中國思想文化學研究室が擔當する。當分野の野間文史教授が左記の方法で基礎資料を作成し、市來津由彦が野間教授と相談しつつ削除と補充を行い、最終的には市來が確定した。分類等については、ほぼ従來の方式を踏襲している。作成の基準はおよそ以下の通りである。

- 一、本目録の掲載は、主として會員からの手紙、メール等によるいわゆる「自己申告」を基本とし、擔當者の調査によって補充している。その補充の方法は、主としてインターネット上で公開されている出版情報である。特に論文に關しては、國立國會圖書館の藏書檢索 (NDLJOPAC) を中心として各種學會誌・研究誌を調査しているが、各大學等の紀要類を精査するには及んでいない。遺漏の點は、どうかご連絡をいただきたい。
- 二、分類は單行本、論文、書評等を、「一、總記」から「十二、その他」まで、およそテーマにもとづいて分類し、収録してある。分類が困難な場合は、「總記」または「その他」に入れた。

學界展望 (哲學) (二〇〇六年一月〜十二月)

また研究回顧や書評は「その他」に、時代が複数にまたがるものは「總記」に分類している。復刻、再刊、再版本も入れた。

三、各分野の並べ方は、著者、編者、譯者等の氏名を、(とくに中國語讀み、韓國・朝鮮語讀みを求められた場合を除いて) 五十音順に配列してある。

四、収録した刊行物は、二〇〇六年一月〜二〇〇六年十二月の間に出版されたものであるが、會員からの申し出のあった場合を中心にこの期間の前年のものを「十三、補遺」として付してある。六、本目録は、時間的または人員的な制約によって、遺漏あるいは誤植等が少なからずあるかと思われる。お氣づきの點や訂正等がある場合は、廣島大學大學院文學研究科・市來津由彦 (tchiki@hiroshima-u.ac.jp) にご連絡いただければ幸いである。

單 行 本

一、總 記

安藤 智信 中國近代以降における佛教思想史 法藏館

石川 九楊 文字の現在 書の現在その起源を讀み解く (中公文庫 BIBLIO) 中央公論新社

伊田 喜光 傷寒・金匱藥物事典 萬來舎

稲葉 一郎 中國史學史の研究 (東洋史研究叢刊之七十) 京都大學學術出版會

伊原 弘 圖說・中國文化百華007 王朝の都豐饒の街 中國 都市のパノラマ 農文協

今井 修編 津田左右吉歴史論集 (岩波文庫) 岩波書店

遠藤 次郎 圖說・中國文化百華008 癡す力をさぐる 東の醫學と西の醫學 農文協

大島 立子 宋一清代の法と地域社會 東洋文庫

太田 幸男 中國古代史と歴史認識 (歴史學叢書) 名著刊行會

岡田 英弘 誰も知らなかった皇帝たちの中國 (WACBUNKO) ワック

岡部 和雄 中國佛教研究入門 大藏出版

編 田中 良昭 中國學の十字路・加地伸行博士古稀記念論集 研文出版

加藤 徹 貝と羊の中國人 (新潮新書) 新潮社

金子 修一	中國古代の皇帝祭祀の研究	岩波書店	長江流域と巴蜀、楚の地域文化（アジア地域文化叢書3）	雄山閣	平川 彰	インド・中國・日本佛教通史	春秋社
鹿野 政直	岩波新書の歴史（付・総目録1938〜2006） （岩波新書）	岩波書店	「封建」・「郡縣」再考 東アジア社會體制論の深層	思文閣出版	福井 文雅	アジア思想概論	五曜書房
川合 章子	あらずじでわかる 中國古典「超」入門（講談社+α新書）	講談社新書	西域出土文書の基礎的研究 中國古代における小叢書・童蒙書の諸相（汲古叢書66）	汲古書院	編 福井 重雅	中國古代の歴史家たち 司馬遷・班固・范曄・陳壽の列傳譯注	早稲田大學出版
小島 毅	海からみた歴史と 傳統 遣唐使・倭寇・儒教	勉誠出版	近世儒學研究の方法と課題	汲古書院	藤井 一二	東アジアの交流と地域諸相	思文閣出版
小林 正美	道教の齋法儀禮の 思想的的研究	知泉書館	漢字の起源（講談社學術文庫）	講談社	編 平凡社東洋文庫編集部	東洋文庫ガイドブック2	平凡社
編 小山 鐵郎	白川靜さんに學ぶ 漢字は楽しい	共同通信社	中國歴史研究入門	名古屋大學出版會	堀池 敏一	東アジア世界の形成 中國と周邊國家（汲古叢書64）	汲古書院
監修 白川 靜	圖說 中國文化百華01 君當に醉人を恕すべし 中國の酒文化	農文協	中國の文人像（研文選書95）	研文出版	堀山 信夫	道教研究の最先端 象徴圖像研究 動物と象徴	大河書房
蔡 毅	圖說 龍の歴史大事典	遊子館	中國の思想世界	イズミヤ出版	砂山 稔編	風水講義（文春新書）	文藝春秋社
笹間 良彦	中國古代書簡集（講談社學術文庫）	講談社	中嶋先生退會紀念事業		三浦 國雄	中國文明論集（岩波文庫）	岩波書店
佐藤 武敏	白川靜漢字曆2007	平凡社	二階堂善弘	關西大學出版部	宮崎 市定	中國書論の體系	白帝社
白川 靜	思想としての佛教入門	トランスビュー	道教・民間信仰における元帥神の變容（關西大學東西學術研究所研究叢刊27）		熊 秉明／河内 利治	中國性愛博物館	原書房
末木文美士	中國禪宗寺名山名辭典	山喜房佛書林	中國思想の流れ 下 明清・近現代	晃洋書房	譯 劉 達臨／鈴木 博譯	中國キリスト教史 研究 増補改訂版	山川出版社
鈴木 哲雄	禪學研究入門（第二版）	大東出版社	中國史の研究 宋宗教史と清末民國政治思想史	朋友書店	山本 澄子	東洋における死の思想	春秋社
田中 良昭					編 吉原 浩人		

稲畑耕一郎 監修／劉煒 編／大森信徳 譯	圖說中國文明史7 成熟する文明	創元社	杉山 正明	モンゴルが世界史を覆す(日経ビジネス人文庫)	日本經濟新聞社	稲畑耕一郎 監修／劉煒 著／兒島弘一 郎譯	圖說中國文明史9 在野の文明	創元社
稲畑耕一郎 監修／劉煒 編／杭侃著 表野和江 譯	圖說中國文明史8 遼西夏金元 草原の文明	創元社	宋代史研究 會編	宋代の長江流域社會經濟史の視點から(宋代史研究會研究報告第八集)	汲古書院	稲畑耕一郎 監修／陳儀 著／張偉儀 雄／劉煒編 著／川浩二譯	圖說中國文明史10 文明の極地	創元社
岡田 武彦	岡田武彦全集6王陽明全集抄評釋上	明德出版社	能仁 晃道	訓讀五燈會元	禪文化研究所	宇野 哲人	清國文明記(講談社學術文庫)	講談社
岡田 武彦	岡田武彦全集7王陽明全集抄評釋下	明德出版社	遠藤 茂樹	宋代社會の空間とコミュニケーション	汲古書院	岡田 英弘	紫禁城の榮光(講談社學術文庫)	講談社
奥平 武司	十八史略3梟雄の系譜(徳聞文庫)	徳聞書店	岡田 元司	宋代社會の空間とコミュニケーション	汲古書院	神田 信夫	談社學術文庫	講談社
川嶋 孝周	易學案内 皇極經世書の世界	明德出版社	本田 濟	易經講座程氏易傳を讀む 上(一・二)	斯文會／明德出版	奥崎 裕司	明清はいかなる時代であったか 思想史論集	汲古書院
衣川 強	宋代官僚社會史研究(汲古叢書67)	汲古書院	松本 浩一	宋代の道教と民間信仰	汲古書院	加藤 咄堂	味讀精讀茶根譚前集(處世實際の道)	書肆心水
窪田 新一	モンゴル佛教史研究1(大正大學綜合佛教研究所叢書第8卷)	ノンブル	丸山 廣祥	十八史略1霸道の原點(徳聞文庫)	徳聞書店	中村 璋八	清朝本全譯 菜根譚	東方書店
窪田 新一	モンゴル佛教史研究2(大正大學綜合佛教研究所叢書第16卷)	ノンブル	宮 紀子	モンゴル時代の出版文化	名古屋大學出版會	吉田 純	清朝考證學の群像(東洋學叢書)	創元社
坂井健一編	宋本廣韻全譯第11分冊	汲古書院	戴清 茂清	授時曆 譯注と研究	アイ・ケイコーポレーション	飯島 涉	21世紀の中國近現代史研究を求めて	研文出版
小路 聰	「即今自立」の哲學 陸九淵心學再考	研文出版	青木 彌生	書のグナ 時空を超えた處世訓	文藝社	田中比呂志編		

七、明・清

八、近現代

汪 田雄二 思想空間としての
村山幸雄 現代中國
砂山史郎 岩波書店
小野寺史郎

小林 武 章炳麟と明治思潮
もう一つの近代
(研文選書97)
研文出版

樽本 照雄 商務印書館研究論
集 清末小説研究会

濱智 久雄 勸學篇(中國古典
新書續編) 明德出版

九、琉球・朝鮮

五十嵐眞子 現代臺灣宗教の諸
相 臺灣漢族に關
する文化人類學的
研究 人文書院

崔 在穆 東アジア陽明學の
展開 ぺりかん社

徐 建新 好太王碑拓本の研
究 東京堂出版

裴宗鎬 朝鮮儒學史
川原秀城 知泉書館
監譯

朴 倍暎 儒教と近代國家、
「人倫」の日本、
「道徳」の韓國
(講談社選書メチ
エ) 講談社

池田 溫編 日本古代史を學ぶ
ための漢文入門 吉川弘文館

大桑 一郎 羅山・貞徳『儒佛
問答』註解と研究 ぺりかん社

前田 編 漢字傳來(岩波新
書) 岩波書店

大島 正二 漢文の素養 誰が
たのか?(光文社
新書) 光文社

加藤 徹 義經から一豊へ
大河ドラマを海域
にひらく 勉誠出版

小島 毅 近代日本の陽明學
(講談社選書メチ
エ) 講談社

齋藤 圓眞 天臺入唐入宋僧の
事跡研究 山喜房佛書林

佐々木宏幹 日本占法大全書
藤井 哲雄 四季社
賴富 本宏

清水 茂校 童子問(岩波文庫)
注 岩波書店

杉本直次郎 阿倍仲麻呂傳研究
手澤補訂本 勉誠出版

岸本 美緒 岩波講座「帝國」
日本の學知3 東洋
學の磁場 岩波書店

藤井 省三 岩波講座「帝國」
日本の學知5 東ア
ジアの文學・言語
空間 岩波書店

末廣 昭 岩波講座「帝國」
日本の學知6 地域
研究としてのアジ
ア 岩波書店

竹内 好 竹内好セレクションI
日本への／からのまなざし
竹内好セレクションII
アジアへの／からのまなざし
日本經濟評論社

丸川 哲久 丸川哲久編
／からのまなざし
日本經濟評論社

鈴木 久彦 日本の上皇書序文・
跋文を讀む 大修館書店

高橋 忠彦 制度通? (東洋文
庫) 平凡社

礪波 華護 『蹇蹇録』の世界
(新裝版) みすず書房

森 校訂 講孟餘話(岩波文
庫) 岩波書店

中塚 明 參天臺五臺山記の
研究(關西大學東
西學術研究所叢刊
二十六) 關西大學出版部

廣瀨 豐 兵學と朱子學・蘭
本思想史の構圖
(平凡社選書25) 平凡社

藤善 眞澄 近世儒者の思想挑
戰 思文閣出版

前田 勉 近世儒者の思想挑
戰 思文閣出版

本山 幸彦 近世儒者の思想挑
戰 思文閣出版

十、日 本

横田庄一郎 富永仲基の「樂律
編著 考」儒教と音楽に
印藤和寛 ついて
譯・解説

横山 宏章 長崎が出會った近
代中國(海鳥ブッ
クス)

石本 裕之 『莊子』の中の孔
子 響文社

伊藤 滋 講演・書道と碑法
帖―拓本はこんな
におもしろい
アジヤ學術總合
研究所集刊36

十一、書誌學

井上 進 書林の眺望 傳統
中國の書物世界 平凡社

野村 鮎子 四庫提要南宋五十
家研究 汲古書院

京都大學人 東洋學文獻類目2003
文科學研究 會
情報研究セ 年度

榊 節男 宮内廳書陵部書庫
渉獵 書寫と裝訂 おうふう

工藤 一郎 中國圖書文獻史攷
和刻本漢籍分類目 明治書院
録 増補修正版 汲古書院

藤本 幸夫 日本現存朝鮮本研
究(集部) 京都大學學術出
版會

山城 喜憲 河上公章句『老子
道德經』の研究
慶長古活字版を基
礎とした本文系統
の考察 汲古書院

十二、補遺

論文

一、總記

淺野 裕一 上天・上帝信仰と
砂漠の一神教 中國研究集刊40

吾妻 重二 道教關係著書論文
目録(2005年) 東方宗教108

吾妻 重二 儒教祭祀の性格と
範圍について アジヤ文化交流
研究1(關西大
學アジヤ文化交
流研究センター)

阿純 章 受菩薩戒儀及び受
八齋戒儀の變遷 『道教の齋法儀
禮の思想的研
究』

池田 秀三 鄭學の特質 『兩漢における
易と三禮』

池田 知久 『周易』研究の課
題と方法 『兩漢における
易と三禮』

池田 光子 新出土資料關係文
獻提要(七) 中國研究集刊41
(特集號「戰國
楚簡研究2006」)

池平 紀子 道教と中國撰述經
典 『道教研究の最
先端』

會谷 佳光 中國における『禪
源諸詮集都序』の禪
源傳と出版 二松學舎大學人
文論叢76

王 育成 道教文物の概説 『道教の齋法儀
禮の思想的研
究』

岡内 三眞 シルクロードの地
域、境域、超域に
みる思想と宗教の
傳播 『アジヤ地域文
化學の構築』

岡部 和雄 譯經史と禪宗―
「月をさす指の喩
え」に寄せて 東洋の思想と宗
教23

川原ゆかり <文化>を問ひ直
す―文化概念の再
構築に向けて 『アジヤ地域文
化學の構築』

菊地 章太 道教神學か、比較
思想史か―對論者
の立場から 『道教研究の最
先端』

木村 淳 東アジヤの漢文教
材の比較―中國 中國文化64

小林 正美 靈寶齋法の成立と
展開 『道教の齋法儀
禮の思想的研
究』

小林 正美	金錄齋法に基づく道教造像の形成と展開―四川省綿陽・安嶽・大足の摩崖道教造像を中心に	『道教の齋法儀禮の思想的的研究』	張 翔	『天下公共』と封建郡縣論	『封建・「郡縣」再考』	古川麒一郎 平勢 隆郎	『對談』古川麒一郎先生、古代の天	史料批判研究7
近藤 一成	アジア地域文化學の構築―總論	『アジア地域文化學の構築』	陳木 達明	文學史の視野のなでの『語り』	中國文學報71	堀 豊	好生惡殺の精神	『中國の思想世界』
工藤 元男	東アジアの形成―秦の巴蜀支配と法制・郡縣制	『アジア地域文化學の構築』	土田健次郎	中國近世儒學研究の方法的問題	『近世儒學研究の方法と課題』	堀池 信夫	宗教における戦争と平和についての道教からの視点	『道教研究の最先端』
坂出 祥伸	中國古典、特に思想を學ぶための工器具書・入門書(試稿本)	種智院大學研究紀要7	土田健次郎	東アジアにおける朱子學の機能―普遍性と地域性	『アジア地域文化學の構築』	本郷 隆盛	中國における「封建・郡縣論」と公共性	『封建・「郡縣」再考』
重信あゆみ	女媧の變遷について―文献と畫像石資料にもとづいて	關西大學中國文學會紀要27	中田 喜萬	政治學からみた「封建」と「郡縣」	『封建・「郡縣」再考』	松尾 恆一	民間宗教、比較の視座―對論者の立場から	『道教研究の最先端』
砂山 稔	道教研究の方法と課題	『道教研究の最先端』	永富 青地	陽明學の回顧と展望	『近世儒學研究の方法と課題』	水林 彪	封建・郡縣概念の普遍化の試み―歴史學的概念として(「封建制」と「郡縣制」)	『封建・「郡縣」再考』
高橋龍三郎	アジア地域文化學の發展―總論	『アジア地域文化學の發展』	任 昉	新出土墓誌の集大成―傳統文化の精華	東アジア石刻研究創刊號	森 由利亞	鬼神祭祀と道教・儒教	『近世儒學研究の方法と課題』
武田 時昌	婦人病の醫學思想	中國思想史研究28	萩庭 勇	邊字考	大東文化大學漢學會誌45	森 由利亞	道教と死	『東洋における死の思想』
田中 佩刀	講演・孔子祭講經「學而不思」一章(論語)爲政第二章	斯文114	濱川 榮	黄河と中國古代史―とくに黄河下流域と「空閒」の意義について	歴史學研究820	安本 博	漢文表現と中國的思想の特質に關する一二の考察	『中國學の十字路』
田中 文雄	道教哲學研究の成果と課題	『道教研究の最先端』	林 克	講演・中國傳統醫學と古典學	斯文114	山田 勝久	尉頭頭の調査報告	『中國學の十字路』
谷垣 禎一	座談會アジア文化交流の歴史と未來への展望―海でつながる東アジア	アジア遊學91(特集 碑石は語る)	原 敬二郎	講演・神農本草經九服の意義とアンチエイジング醫學との相關	斯文114	山田 利明	道教儀禮研究の成果と課題	『道教研究の最先端』
伊原 孝弘	な		古屋 昭弘	儒教と中國語學	『近世儒學研究の方法と課題』	横手 裕	道教における性説の諸相	『道教研究の最先端』
張 英弘	總論―封建郡縣論の背景と展望	『封建・「郡縣」再考』				藤井倫明譯	中國經學史上の原典回歸運動	中國哲學彙集31・32

二、先 秦

浅井 茂紀	孔子の倫理哲學論(2)―道徳論を中心として	千葉商大紀要44・3	大形 徹	『莊子』にみえる北と南と中央―鯤と渾沌の寓話をめぐって	『中國學の十字路』	草野 友子	上博楚簡『競建内之』・『鮑叔牙與隰朋之諫』譯注(上博楚簡特集)	中國研究集刊41(特集號「戰國楚簡研究2006」)
浅野 裕一	上博楚簡『君子爲禮』と孔子素王說(上博楚簡特集)	中國研究集刊41(特集號「戰國楚簡研究2006」)	大西 克也	戰國時代の文字と言葉―秦・楚の邊を中心	『長江流域と巴蜀 楚の地域文化』	工藤 元男	楚文化圏の卜筮祭儀習俗―上博楚簡「東大王卜早」を中心に	長江流域文化研究所年報4
浅野 裕一	上博楚簡『鬼神之明』と『墨子』明鬼論(上博楚簡特集)	中國研究集刊41(特集號「戰國楚簡研究2006」)	小澤 賢二	汲冢竹書再考	中國研究集刊42	工藤 元男	長江流域の地域文化論をめぐって	『長江流域と巴蜀 楚の地域文化』
浅野 裕一	上博楚簡『相邦之道』の全體構成	『中國學の十字路』	落合 淳思	殷代占卜工程の復元	立命館文學594	小崎 智則	道家思想と『韓非子』―解老篇を中心に	名古屋大學中國哲學論集5
浅野 裕一	新出土資料と諸子百家	中國研究集刊38	片倉 望	『老子』と孟子の性善説―復歸の構造	『中國の思想世界』	小南 一郎	傳統的な書誌學はもう無力なのか―『中國出土文獻の世界』	創文492
浅野 裕一	上博楚簡『曹沫之陳』の兵學思想	中國研究集刊38	加地 伸行	講演・儒教から見た現代―孔子を通して	モラロジー研究57	小寺 敦	『左傳』の同姓不婚について	日本秦漢史學會報7
石川三佐男	「蟠螭紋精白鏡」の銘文と「楚辭」	東方宗教108	木下 鐵矢	『君』の立場にふさわしい人物	人間會議2006夏號	近藤 浩之	『孟子』萬章下篇「其至爾力也」の再解釋	中國哲學34
伊藤 圓	研究ノート・黃帝	中國思想史研究28	桐本 東太	春秋時代の降伏儀禮	長江流域文化研究所年報4	坂上 康俊	出土文獻研究と出土文字資料研究(特集・中國出土文獻の世界)	創文492
稻畑耕一郎	習俗と歌謠から見た中國基層文化の地域性と普遍性	『アジア地域文化學の發展』	衣笠 勝美	「敬鬼神而遠之」―考へ儒教の宗教性について	『中國學の十字路』	佐藤 貢悅	荀子天人論の論理構造について	哲學・思想論叢24
井上 了	中國古典への應用(2)分析)應用)に對する若干の疑問	中國研究集刊42	草野 友子	『上海博物館藏戰國楚竹書(五)』について―形制―覽と所収文獻概要	中國研究集刊40	佐藤 信彌	西周期における周新宮の役割	中國古代史論叢3
井上 了	荀子の理想王國における世襲制と天子位禪讓と官吏の世襲	『中國學の十字路』	草野 友子	新出土資料關係文獻提要(8)	中國研究集刊42	佐野 光一	帛書老子乙本の文字形體―漢隸の成熟	若木書法5

澁谷 由紀	『孟子』の性説と『五行』について	東洋の思想と宗教23	竹田 健二	上博楚簡『采風曲』について―契口を中心に	『中國學の十字路』	平林 縁萌	墨子救末説話考	中國古代史論叢3
徐少華／井上 了	郭店一號楚墓年代析論(郭店楚簡特集)	中國研究集刊41(特集號「戰國楚簡研究2006」)	武田 時昌	老子における時空存在論的概観	『中國學の十字路』	福田 哲之	出土古文献復原における字體分析の意義―上博楚簡の分篇および拼音・編聯を中心として(上博楚簡特集)	中國研究集刊41(特集號「戰國楚簡研究2006」)
關 清孝	『墨子問詁』における『爾雅』の利用	大東文化大學漢學會誌45	館野 正美	『易』占に本づく儒道思想の起源に關する試論―併せて易の乾坤陰陽の字義を論ず	『中國學の十字路』	藤田 勝久	包山楚簡と楚國の情報傳達	中國研究集刊38
戰國楚簡研究会	『上博楚簡』解題―上海博物館藏戰國楚竹書(三)(四)所收文献	中國研究集刊38	張 正明／閻 瑜	易經文の歴史的觀點による解釋	『中國學の十字路』	福田 哲之	上博楚簡『内禮』の文献的性格	中國研究集刊38
戰國楚簡研究会	中國湖北省荊門・荊州學術調查報告	中國研究集刊38	塘 耕次	『易』占に本づく儒道思想の起源に關する試論―併せて易の乾坤陰陽の字義を論ず	『中國學の十字路』	藤田 勝久	中國古代の秦と巴蜀、楚―文字資料の情報傳達	『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』
曹 峰	『尹文子』に見える名思想の研究	東洋文化研究8	鄭 吉雄／近藤 浩之	上博楚簡『昭王毀室』等三篇の作者と作品のスタイルをめぐって	中國哲學34	藤田 勝久	巴蜀青銅器文化における文字	『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』
高田哲太郎	『鬼谷子』の聖人觀	集刊東洋學96	陳 偉	『莊子』の厄言戰略―ポリフォニーと沈黙	『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』	松村 一徳	巴蜀青銅器文化における文字	『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』
高田哲太郎	校訂鬼谷子三卷譯稿(1)	中國研究集刊40	橋本 敬司	記號化される孔子「宋襄の仁」の原風景―泓の戰	廣島大學大學院文學研究科論集66(特集號2)	松村 一徳	巴蜀青銅器文化における文字	『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』
高田哲太郎	校訂鬼谷子三卷譯稿(2)	中國研究集刊42	橋本 敬司	『莊子』の厄言戰略―ポリフォニーと沈黙	廣島大學大學院文學研究科論集66(特集號2)	松村 一徳	巴蜀青銅器文化における文字	『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』
高田哲太郎	『鬼谷子』の文献學的考察―武内義雄説をめぐって	『中國の思想世界』	橋本 敬司	記號化される孔子「宋襄の仁」の原風景―泓の戰	廣島大學大學院文學研究科論集66(特集號2)	松村 一徳	巴蜀青銅器文化における文字	『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』
谷口 満	戰國楚文化の淵源―楚文化・巴文化同源説?	『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』	橋本 敬司	記號化される孔子「宋襄の仁」の原風景―泓の戰	廣島大學大學院文學研究科論集66(特集號2)	松村 一徳	巴蜀青銅器文化における文字	『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』
竹内 康浩	『山海經』五藏山經の天下・國・邑	東方宗教108	原 孝治	墨子校注攷	大東文化大學漢學會誌45	森 和	戰國楚における宜忌の論理―子彈庫楚帛書三篇の關係を例に	『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』
竹田 健二	『出土簡帛文獻與古代學術國際研討會』參加記	中國研究集刊40	平勢 隆郎	日食をめぐる興味深い問題	史學雜誌115―3	水間 大輔	蛇神から文昌帝君へ―蜀地における陷河説話・五丁五婦説話の歴史的展開	『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』

八木 章好	「狂狷」の系譜― 中國古代思想にお ける「狂」の諸相 (一)	慶應義塾大學言 語文化研究所紀 要37	李 承律	王國維の豫言と中 國出土資料研究 (特集・中國出土 文獻の世界)	創文492	淺野 裕一	漢の色(特集・色 の文藝史―隠され たメッセージ) (思想の色、色の 思想)	國文學51―2
山田 史生	見ることと考える こと―『道經』首 章攷	『中國の思想世 界』	李 承律	馬王堆漢墓帛書 『周易』の謙遜思 想とその思想的 意義	人文科學11	伊藤 浩志	荀悅『申鑿』『漢 紀』における君臣 關係の構造	哲學58
湯淺 邦弘	語り繼がれる先王 の故事―上博楚簡 『昭王與襄之旌』 の文獻的性格	中國研究集刊40	劉廣瀨 劉樂賢/ 譯 薰雄	出土文獻から見た 楚と秦の選擇術の 異同と影響―楚系 選擇術中の「危」 字の解釋を兼ねて	『兩漢における 易と三禮』	井ノ口哲也	『三綱』成立考	東京學藝大學紀 要2人文社會科 學系57
湯淺 邦弘	上博楚簡『三德』 の天人相關思想 (上博楚簡特集)	中國研究集刊41 (特集號「戰國 楚簡研究2006」)	劉佐野 譯 祖信/ 大介	郭店楚簡發見の日 に(郭店楚簡特集)	中國研究集刊41 (特集號「戰國 楚簡研究2006」)	井ノ口哲也	『通』攷	『中國學の十字 路』
湯淺 邦弘	上博楚簡『三德』 の全體構造と文獻 的性格(上博楚簡 特集)	中國研究集刊41 (特集號「戰國 楚簡研究2006」)	劉上野 劉彬徽/ 譯 洋子	郭店楚簡の年代及 びそれに關する問 題の檢討(郭店楚 簡特集)	中國研究集刊41 (特集號「戰國 楚簡研究2006」)	宇佐美一博	『穀梁傳』と『繁 露』―趙盾と許止 をめぐって	文學論叢(愛知 大學文學會)133
湯淺 邦弘	父母の合葬―上博 楚簡『昭王毀室』 について	東方宗教107	林 正基	中國古代思想にお ける天觀と人性觀 (「わたし」の喪失、 自明性の解體― 『莊子』齊物論に おける「吾喪我」 について)	中國の思想世 界』	王 啓發/ 孫 承律/ 譯 險峰	『禮記』王制篇と 古代國家法思想	『兩漢における 易と三禮』
横田 恭三	中國古代の筆記文 字と書寫用具	『長江流域と巴 化』楚の地域文 化』	和田 和子	中國古代思想にお ける天觀と人性觀 (「わたし」の喪失、 自明性の解體― 『莊子』齊物論に おける「吾喪我」 について)	中國の思想世 界』	王 啓發/ 孫 承律/ 譯 險峰	鄭玄『三禮注』と その思想的意義	『兩漢における 易と三禮』
吉永慎二郎	孔子から墨家そし へ―中國文明にお ける政教一體シス テムの形成	學士會會報2006・ 6	和田 敬典	西周金文に見える 「卿事寮」に關す る再檢討	中國哲學34	孫 啓發/ 孫 承律/ 譯 險峰	鄭玄『三禮注』と その思想的意義	『兩漢における 易と三禮』
吉永慎二郎	墨家の非命思想の 戰國思想史および 中國思想史に對す る役割について	秋田大學教育文 化學部研究紀要 人文科學・社會 科學61	和田 敬典	西周金文に見える 「卿事寮」に關す る再檢討	中國哲學34	王 啓發/ 孫 承律/ 譯 險峰	鄭玄『三禮注』と その思想的意義	『兩漢における 易と三禮』
吉本 道雅	夏殷史と諸夏	中國古代史論叢 3	和田 敬典	西周金文に見える 「卿事寮」に關す る再檢討	中國哲學34	孫 啓發/ 孫 承律/ 譯 險峰	鄭玄『三禮注』と その思想的意義	『兩漢における 易と三禮』

三、秦・漢

黄 曉芬
漢長安城建設における南北の中軸ラインとその象徴性

史學雜誌 115 |

近藤 則之
『史記』魯世家と『左傳』の關係

佐賀大學文化教育學部研究論文集 11・1

近藤 則之
『史記』における『左傳』の解經について

佐賀大學文化教育學部研究論文集 10・2

近藤 浩之
『日書』より見た『周易』卦爻辭の用語・語法に関する考察

『兩漢における易と三禮』

串田 久治
災異思想は荒唐無稽か？

『中國學の十字路』

工藤 元男
東アジア世界の形成と百越・南越の關係を中心に

『アジア地域文化學的發展』

坂本 具償
『春秋繁露』譯注稿(奉本・深察名號・實性・郊義・郊祭・四祭篇)

高松工業高等專門學校研究紀要 41

佐野 大介
後漢の孝批判と『荀子』の孝觀と

『中國學の十字路』

城山 陽宣
賈誼年譜長編序説資料編年上の問題點を中心に

關西大學中國文學會紀要 27

蕭漢明／白井順
漢代易學の基本的な特徴について

『兩漢における易と三禮』

辛 賢
易緯における世軌と『京氏易傳』

『兩漢における易と三禮』

高村 武幸
漢代地方少吏の任用と文字の知識について

東方學 111

高津 純也
春秋公羊傳何休注の「中國」と「夷狄」について—公羊傳文との比較から

史料批判研究 7

趙 立男
孟京易學と『易緯』

名古屋大學中國哲學論集 5

田中 千壽
何休『春秋公羊經傳解詁』における「例」をめぐる一考察

名古屋大學中國哲學論集 5

仲山 茂
前漢侯國の分布—『漢書』外戚恩澤侯表を中心に

名古屋大學東洋史研究報告 30

南部 英彦
『淮南子』に見える一つの君主像

『中國の思想世界』

野村 英登
『春秋繁露』註釋稿(31)

東洋大學中國哲學文學科紀要 14

橋本 明子
譯註銀雀山漢簡『守法守令等十三篇』譯註(4)

名古屋大學東洋史研究報告 30

馬場理恵子
「主四時」と月令

日本秦漢史學會會報 7

春本 秀雄
『緯書研究』とその展開—中國學のベクトルと復活

『中國學の十字路』

福井 重雅
漢代儒教の官學化と儒服の役割

日本秦漢史學會會報 7

藤田 勝久
『史記』の素材と出土資料

愛媛大學法文學部論集人文學科 20

堀池 信夫
漢代の「權」について

『兩漢における易と三禮』

堀池 信夫
夫人の出國—董仲舒の「變禮」についての補遺

『兩漢における易と三禮』

松島 隆眞
匈奴の出現と前漢高祖期の政治—功臣表より探る

中國古代史論叢 3

間嶋 潤一
『尚書中候』の受命神話—皋陶・秦穆公の場合

香川大學國文研究 31

宮宅 潔
『周禮』の成書時期・地域について

東方學報 78

初山 明
王杖木簡再考

東洋史研究 65 |

矢野野隆男
『稽夫論』巫列篇譯注稿

四天王寺國際佛敎大學紀要 42

山田 崇仁
董仲舒對策における「天」と「命」—「儒敎國教化」の思想史的構造への一考察

中國古代史論叢 3

吉永慎二郎
一種の注目に値する古代文學文獻—『緯書』河圖帝覽嬉』新考

『中國學の十字路』

劉中 樂賢／田中 靖彦
孝子圖の思想的背景—武氏祠畫像石を中心にして

『兩漢における易と三禮』

梁 音
名古屋大學中國哲學論集 5

名古屋大學中國哲學論集 5

早稲田大學
簡帛研究會
譯注張家山第二四
七號漢墓竹簡譯注
(4)二年律令譯
注(4)錢律譯注

鷺尾 祐子
「爲止」考—漢代
における戸と國家
負擔

渡邊 義浩
後漢における禮と
故事

四、魏・晉・南北朝

音成 彩
梁元帝『金樓子』
について

影山 輝國
『論語義疏』校定
本及校勘記—皇侃
自序

金 志玟
『大洞真經』の實
修における身體—
『雲笈七籤』—釋三
十九章經—を踏ま
えて

小林 正美
道教の齋法儀禮の
原型の形成—指教
齋法の成立と構造

小林 正美
劉宋・南齊期の天
師道の教理と儀禮

齋藤 智寛
王弼の見た『老子』
界

三國時代出
土文字資料
の研究班譯
江陵張家山漢墓出
土二年律令—譯
注稿(その3)

高野 淳一
淨影寺慧遠と吉藏
の維摩經解釋をめ
ぐって

田中麻紗巳
春秋穀梁傳范甯注
の一考察

馬場 英雄
嵇康の「太師箴」
について

平井 有慶
法顯の往き過ぎた
道

福井 重雅
華嶠『後漢書』に
ついて

藤井 律之
魏晉南朝の選官制
度に關する二三の
問題—侍中領衛を
中心として

堀口 育子
『莊子』内篇 郭象
註の典故

宮澤 正順
中國佛敎史上にお
ける陶淵明と謝靈
雲

安田 二郎
曹魏明帝の「宮室
修治」をめぐる
六朝初期における
觀音信仰の—側面—
青蓮院抄本・傳亮
『光世音應驗記』
の比較検討から

山崎 順平
集刊東洋學95

山田 利明
「魏文明佛道造像
碑」—一則

餘 崇生
吉藏の判敎思想

渡邊 義浩
司馬彪の修史

渡邊 義浩
西晉における國子
學の設立

渡邊 義浩
西晉司馬氏婚姻考

荒川 正晴
北朝隋唐初の在俗
佛敎信徒と五道大
神

薄井 俊二
「天臺山記」所收
の王羲之習書說話
をめぐる

神鷹 徳治
『白敏中墓誌銘』
拓本について

神塚 淑子
隋代の道教造像

洲脇 武志
『後漢書』李賢注
所引「前書音義」
考

野間 文史
五經正義讀解通論
(2)

野間 文史
五經正義讀解通論
(3)

野間 文史
周易正義引書索引

野間 文史
毛詩正義引書索引

大東文化大學漢
學會誌45

東洋研究159

東洋研究161

『中國學の十字
路』

『中國學の十字
路』

東アジア石刻研
究創刊號

名古屋大學文學
部研究論集156
(哲學52)

大東文化大學漢
學會誌45

東洋古典學研究
21

東洋古典學研究
22

東洋古典學研究
22

廣島大學大学院
文學研究科論集
66(特輯號1)

馬場 英雄

韓愈における「道」の諸相について 5

市來津由彦

朱熹における「理一分殊」の風景

『中國の思想世界』

木下 鐵矢

『朱子語類』に見える「物事」について(2)

22 東洋古典學研究

肥田 路美

佛教摩崖造像からみた四川地域文化の構築

市來津由彦

朱熹『朱文公文集』跋文譯注稿(2)

東洋古典學研究

木下 鐵矢

『格物』という陥穽

陽明學 18

松本 保宣

唐代則天期の宮廟・太極宮を中心として

伊原 弘

寧波で發見された博多在住の宋人寄進碑文續論

アジア遊學 91 (特集 碑石は語る)

木下 鐵矢

心にある靜動の規則性をつかむ

人間會議 冬號

宮澤 正順

佛教と道教の『父母恩重經』の出現について

伊原 弘

地圖と刻石された都市空間

アジア遊學 91 (特集 碑石は語る)

近藤 一成

南宋地域社會の科擧と儒學

『近世儒學研究の方法と課題』

山部 能宜

北宗禪文獻にみられる唯識教義の影響

伊原 弘

宋代中國の都市と知識人―比較史の立場から

アジア遊學 86 (特集 アラブの都市と知識人)

櫻井 智美

中國における蒙元刻調査の意義

東アジア石刻研究 創刊號

横倉 佳男

唐代の隸書(2) 墓

今場 正美

『太平廣記』夢部譯注(1)

學林 43

佐藤 仁

劉敞の春秋學について

21 東洋古典學研究

六、宋・金・元

吾妻 重一

性理大全の成立と朱子成書

大澤 正昭

胡石璧の「人情」

『宋―清代の法と地域社會』

塩出 雅

『詩本義』に見る序および毛・鄭批判

『中國學の十字路』

吾妻 重一

宋代の景靈宮について

大島 立子

「承繼」判例から見た法の適用

『宋―清代の法と地域社會』

下定 雅弘

柳宗元の「田家三首」について

『中國學の十字路』

飯山 知保

楊業から元好問へ―一〇〇〇―三世紀の浸透とその歴史の意義について

垣内 景子

翻譯『朱子語類』五・1條、10條

明治大學教養論集 41

石 立善

『晦庵先生語錄大綱領』攷

28 中國思想史研究

石岡 浩

北宋景祐刊『漢書』刑法志第十四葉の復元―前漢文帝刑法改革詔の文字の増減をめぐって

垣内 景子

朱子學研究の課題

『近世儒學研究の方法と課題』

須江 隆

碑記に刻まれた反亂の風説―方臘傳説の成立と擴大

3 東洋古典學研究

東方學 111

木下 鐵矢

『朱子語類』に見える「物事」について(1)

21 東洋古典學研究

須江 隆

碑記に刻まれた反亂の風説―方臘傳説の成立と擴大

3 東洋古典學研究

曾 貽芬／ 崔文印／ 山口 謠司 他譯	宋代の「類書」と 「資料集成」 大東文化大學漢 學會誌45	船田 善之	元代の命令文書の 開讀使臣について その人的構成と巡 歴ルートを中心に	東方學111	石橋 成康	明初の異僧―姚廣 孝	『中國思想の流 れ(下)』
田中 秀樹	宋代道學士大夫の 「狂」者點へのの 憧れ―朱熹とその 弟子との問答を中 心にして	森 博行	邵雍の詩にあらわ れた養生術―「二 十五日、韻に依り 左藏吳傳正寺丞に 贈らるるに和す」 詩を中心に	中國文學報71	伊東 貴之	明清思想をどう捉 えるか―研究史の 素描による考察	『明清はいかな る時代であったか』
田中 正樹	秦觀思想初探	山田 俊	董思靖『道德眞經 集解』の思想	『中國の思想世 界』	上田 弘毅	王陽明に於ける近 代化への可能性と その限界	『明清はいかな る時代であったか』
陳 文輝／ 高橋 文治	玉簫の物語	横山 健一	宋代春秋學と解釋 文の創作	中國哲學叢刊31・ 32	内田 直文	儒・道・佛三教の 合一の精華―『清 朝本全譯 榮根譚』 をめぐって	東方 308
土田健次郎	「治統」覺書―正 統論・道統論との 關係から	林 鳴宇	宋代天臺教學の 「十類」(上)	東方文化研究所 紀要149	翁 玉強	乾嘉考證學學者的 中晩年言語和學術 以中年辭官的學者 爲中心	名古屋大學中國 哲學論集5
土田健次郎	中國近世儒學研究 の方法的問題	大西 晴隆	陽明學の祖―王守 仁	『中國思想の流 れ(下)』	大橋 由美	讀段注 助辭ノ ト(2)	44 國學院大學紀要
中 純子	陳陽『樂書』の研 究(2)	七、明・清			奥崎 裕司	儒教文明の滅亡	『明清はいかな る時代であったか』
中村 喬	中國料理史におけ る「灸」再考―元 代増補『事林廣記』 に據って	淺井 紀	明代順天保明寺再 考―呂妞の死をめ ぐって	東方學111	小川 快之	明代江西における 開發と法秩序	『宋―清代の法 と地域社會』
二階堂善弘	『法海遺珠』の元 帥神について―道 教の醮・民間信仰 の儀禮と元帥	荒木 見悟	楊慈湖論	22 東洋古典學研究	川勝 守	明代、雲南・貴州 兩省の成立	東方學112
西脇 常記	宗鑑撰『釋門正統』 について	池田 秀三	清朝考證學の開祖― 顧炎武	『中國思想の流 れ(下)』	葛谷 登	ヴァニョーニと 『天主教要解略』	『明清はいかな る時代であったか』
平田 茂樹	宋代の列女顯彰の 構造―『宋史』列 女傳を手掛かりと して	井澤 耕一	楊慎の王安石批判 について	『中國學の十字 路』			
	アジア遊學91 (特集 碑石は語 る)	石黒 宣俊	『八經皆史論』― 章學誠	『中國思想の流 れ(下)』			

久芳 崇	明末における武官 統制と火器技術受 容―都督劉(テイ) の事例を中心に	歴史學研究 823	杉山 文彦	清末中國社會と封 建郡縣論	『封建』・『郡縣』 再考	鶴成 久章	明代餘姚の『禮記』 學と王守仁―陽明 學成立の一背景に ついて	東方學 111
黒坂 滿輝	考證學的批判的精神― 戴震	『中國思想の流 れ(下)』	錢邊 賢明	王陽明遺像綜考	陽明學 18	鶴成 久章	斷么絶六―字を識 らなかつた會元	福岡教育大學國 語科研究論集 47
黒田 秀教	章學誠の「道」に ついて	中國研究集刊 40	小路口 聰	王龍溪の「根本知」 をめぐる考察―あ るいは、「生」の 哲學としての良知 心學	陽明學 18	陶 徳民	晩清時代における 儒教とキリスト教 の交渉―王翰の西 洋受容の契機と姿 勢	『中國學の十字 路』
吳 端	高攀龍の格物論	九州中國學會報 44	瀧野 邦雄	『論語』郷黨篇と 八股文と	『中國學の十字 路』	富田 昇	恭王府文物流出と その政治的背景	『道教の齋法儀 禮』的思想的研究
坂出 祥伸	龔自珍―憂愁の詩 人的思想家―附 「平均篇」譯注	新しい漢字漢文 教育 42	瀧野 邦雄	清代八股文におけ る八股・提股・出 題・中股・後股 と收股について (4)	和歌山大學『經 濟理論』 329	永富 青地	陽明學の回顧と展 望	『近世儒學研究 の方法と課題』
佐藤 一好	王言『聖師錄』に 關する試論	『中國學の十字 路』	瀧野 邦雄	清代八股文の精神 (1)	和歌山大學『經 濟理論』 331	永富 青地	陽明學研究の回顧 と展望	『近世儒學研究 の方法と課題』 汲古書院
佐藤鍊太郎	敬虔な朱子學者― 胡居仁	『中國思想の流 れ(下)』	瀧野 邦雄	國を憂えること家 の如し―劉宗周	『中國思想の流 れ(下)』	永富 青地	上海圖書館藏『新 刊陽明先生文錄續 編』について	東洋の思想と宗 教 23
佐藤鍊太郎	明代「氣の哲學」 の先驅―羅欽順	『中國思想の流 れ(下)』	瀧野 邦雄	國は滅ぶべし、史 は滅ぶべからず― 黃宗羲	『中國思想の流 れ(下)』	永富 青地	尊經閣文庫藏『新 鐫武經七書』につ いて	『人文』社會科學 研究 46
佐藤鍊太郎	陽明學派の狂者― 李贄	『中國思想の流 れ(下)』	竹内 弘行	陳虬『治平三議』 の大同思想	『中國學の十字 路』	中林 史朗	『咳餘叢考』訓譯 卷七之上	大東文化大學漢 學會誌 45
佐野 公治	陽明學と交流した 穩健主義者―湛若 水	『中國思想の流 れ(下)』	武田 時昌	西洋科學の啓蒙思 想家―方以智	『中國思想の流 れ(下)』	中村 俊也	近代の氣風をひら く文人思想家―龔 自珍	『中國思想の流 れ(下)』
佐野 公治	庶民出身の啓蒙思 想家―王良	『中國思想の流 れ(下)』	玉木 尙之	黃道周「聲無哀樂 辨」を詠む―「聲 無哀樂論」をめぐ つて(2)	東洋古典學研究 21	野間 文史	顧憲成『小心齋 記』卷一譯注(5)	陽明學 18
下見 隆雄	藍鼎元『女學』の 研究(9)	東洋古典學研究 21	塘 耕次	清初の陽明學者― 唐甄	『中國思想の流 れ(下)』	野間 文史	日知錄訓注尙書篇 (1)	東洋古典學研究 22
下見 隆雄	藍鼎元『女學』の 研究(10)	『中國思想の流 れ(下)』						
杉山 一也	經書の觀測者―焦 循	『中國思想の流 れ(下)』						

野間 文史	閻若璩『尚書古文疏證』演習(3)	21	三浦 秀一	王夫之『莊子解』における「寓庸」の立場	『中國の思想世界』	山口 久和	詩註の學—思想史の一端を窺うものとして	『中國學の十字路』
橋本 高勝	文獻主義の禪學—明末の四大師	『中國思想の流れ(下)』	三浦 秀一	萬物一體の仁の追究者—彭紹升	『中國思想の流れ(下)』	山口 久和	折衷主義の苦惱と限界—顧憲成	『中國思想の流れ(下)』
橋本 高勝	文化史的學問方法の確立者—阮元	『中國思想の流れ(下)』	張壽安／田村 雅晴	「親親・尊尊—二系並列の情理構造(下)」	中國哲學34	山口 久和	宋學の脱超越化—王夫之	『中國思想の流れ(下)』
濱口富士雄	乾嘉期の考據學における實證主義の展開—錢大昕	『中國思想の流れ(下)』	和田 敬典	趙翼『廿二史劄記』譯注—卷一(中)	中國哲學34	山本 英史	健訟の認識と實態	『宋—清代の法と地域社會』
林 文孝	中國における封建・郡縣論—顧炎武「郡縣論」の位置	『封建・郡縣』再考	水上 雅晴	顧炎武『日知錄』科學編對議(6)十八房	中國哲學34	横久保義洋	沈壺の學術形成	『中國學の十字路』
疋田 啓佑	呂坤の政治思想—張居正との關係にみる	九州中國學會報44	金原 泰介	『全上古三代秦漢三國六朝文』の纂と孫星衍幕府—幕主の金石資料とその交友關係を中心に	中國哲學34	横手 裕	張宇初の齋法觀とその周邊—南昌派考察序說	『道教の齋法儀禮の思想的的研究』
古屋 昭弘	書籍の流通の地域言語—明末清初を例として	『アジア地域文化學の發展』	水上 雅晴	『全上古三代秦漢三國六朝文』の纂と孫星衍幕府—幕主の金石資料とその交友關係を中心に	北海道大學文學研究科紀要119	林 宇萍	漢川善書における傳統宣講の繼承と變容	九州中國學會報44
本多 道隆	嘉興大藏經の刊刻事業と紫柏真可の佛語の傳播と自心の闡明	集刊東洋學95	村瀬 裕也	清代 前中期思想史概説	『中國思想の流れ(下)』	渡邊 大	顧炎武「五方之音說」—とその批判—毛奇齡・錢大昕の所說を中心に	中國文化64
馬淵 昌也	明代後期における「氣の哲學」の三類型と陳確の新思想	『明清はいかなる時代であったか』	村瀬 裕也	物と心との分裂—李贄	『中國思想の流れ(下)』	八、近現代		
濱島 敦俊	明末華北の地方士人像	『宋—清代の法と地域社會』	村瀬 裕也	勞作における物と心の再生—顏元	『中國思想の流れ(下)』			
松川 健二	明代思想史概説	『中國思想の流れ(下)』	森 由利亞	清朝四川の全眞教と天師道儀禮	『道教の齋法儀禮の思想的的研究』	淺野 春二	道教儀禮の依頼者と閩南系臺灣南部から	『道教研究の最先端』
松川 健二	明代の氣二死論者—王廷相	『中國思想の流れ(下)』	森 由利亞	蔣豫浦の呂祖扶乩信仰と全眞教—「清微宏範道門功課」の成立をめぐる	『道教研究の最先端』	阿部 兼也	早期魯迅の科學精神と革命	東洋大學中國哲學文學科紀要14

吾妻 重一	中國哲學の近代代理論化—馮友蘭	『中國思想の流 れ(下)』	小林 武	こころの深みへ— 章炳麟	『中國思想の流 れ(下)』	橋本 高勝	殷周史命の新解釋— 王國維	『中國思想の流 れ(下)』
池田 秀三	黃侃(禮學 略説) 詳注稿(一)	中國思想史研究	子安加餘子	中國知識人と民俗 學に關する—考察— 江紹原の迷信研究—	お茶の水女子大 學中國文學會報	丸山 宏	儀禮文書の歴史よ り見る現代臺灣の 道教儀禮	『道教研究の最 先端』
井澤 耕一・ 橋本 昭典	周豫同注皮錫瑞 『經學歷史』全譯 (22)	千里山文學論集	櫻井 龍彦	妙峰山における 「香會」の復活と 現代的意義	『中國學の十字 路』	丸山 松幸	中國最初のマルク ス主義者—李大釗	『中國思想の流 れ(下)』
井澤 耕一・ 橋本 昭典	周豫同注皮錫瑞 『經學歷史』全譯 (23)	千里山文學論集	佐藤 慎一	封建制は復活すべ きか	『封建—郡縣— 再考』	三石 善吉	近現代思想史概説	『中國思想の流 れ(下)』
石井 剛	理を以て人間を殺 させないために— 清末民初期におけ る「戴震の哲學」 論再考	『明清はいかな る時代であった か』	高柳 信夫	「現代思想」とし ての陽明學—梁啓 超の「陽明觀」 についての考察	『明清はいかな る時代であった か』	三石 善吉	この地上に神の國 を—洪秀全	『中國思想の流 れ(下)』
岩佐 昌暉	硬骨の「修正主義」 哲學者—楊獻珍	『中國思想の流 れ(下)』	竹内 弘行	譯注康有爲『大同 書草稿』譯注(6)	名古屋大學中國 哲學論集5	三石 善吉	開明的傳統主義者 の領袖—張之洞	『中國思想の流 れ(下)』
岩佐 昌暉	マルクス主義の解 說者—文思奇	『中國思想の流 れ(下)』	武田 秀夫	清末の萬物一體論 者—譚嗣同	『中國思想の流 れ(下)』	矢羽野隆男	『日本國志』禮俗 志「佛教」譯注 (上)	四天王寺國際佛 教大學紀要43
浦山 きか	魯迅と醫學—十全 なる知への憧憬	『中國の思想世 界』	武田 秀夫	國民革命の父—孫 文	『中國思想の流 れ(下)』	山田 敬三	實存主義者—魯迅	『中國思想の流 れ(下)』
川崎ミチコ	『玉歴鈔傳』につ いて(其の2)	東洋大學中國哲 學文學科紀要14	手代木有兒	清末—中西文明觀の 形成—一八七〇年 代末から九〇年代 初を中心	『中國の思想世 界』	遊佐 徹	『天演論』と『吳 京脚節本天演論』— 『天演論』の讀ま れ方についての— 考察	中國文史論叢2
後藤 延子	榮光と悲慘の農民 戰爭の革命家—毛 澤東	『中國思想の流 れ(下)』	手代木有兒	洋務世代知識人に おける西洋體験と 文明觀の轉換(2)	商學論集(福島 大學經濟學會) 74・3	吉田 順一	近現代内モンゴル 東部地域の變容と オボ—	『アジア地域文 化學の構築』
後藤 延子	世界の未來は中國 文化である—梁漱 溟	『中國思想の流 れ(下)』	中村 俊也	激變期に反省され る改革の先蹤—魏 源	『中國思想の流 れ(下)』	李 豐楙/ 譯 志清	臺南王礁傳統と地 方瘟神信仰	『道教研究の最 先端』
小林 武	章炳麟における實 證的問題—西洋近 代的知識の意	『中國學の十字 路』	野田 善弘	南京時期の唐君毅 について	東洋古典學研究 22			
小林 武	満ち足りた欲望の 世界—康有爲	『中國思想の流 れ(下)』	橋本 高勝	近代思想の翻譯紹 介者—嚴復	『中國思想の流 れ(下)』			

九、琉球・朝鮮

成	賢昌	韓國における朱子學研究の動向―2000年から2005年6月まで	東洋の思想と宗教23	吾妻 重二	閑谷學校釋菜の參觀	還流2(關西大學アジア文化交流研究センター)	大楠 敦弘	『性理子義』の訓點を通して見た羅山・丈山の讀解	漢文學解釋與研究9
成	賢昌	韓國における朝鮮儒學研究の課題	『近世儒學研究の方法と課題』	井上 了	中井履軒『弊帚』および草稿の篇次について	懷徳堂センター報2006	大島 晃	注釋羅山隨筆抄訓釋稿(1)	漢文學解釋與研究9
全	學哲	李退溪の理氣論について―無極太極論を中心に	中國哲學叢集31・32	井上 了	中井履軒『越祖戴筆』に見える門脈とゲール管について	懷徳74	岡 元司	根本武夷の『論語義疏』翻刻に見られる改編について	大東文化大學漢學會誌45
中	純夫	王守仁の文廟從祀問題をめぐって―中國と朝鮮における異學觀の比較	『明清はいかなる時代であったか』	井上 了	中井履軒の「顯微鏡記」について―附・譯語「顯微鏡」について	『見る科學』の歴史(大阪大學出版會)	川島 恂二	墓石に残る隠し文字紋―隠れキリシタンが石に秘めたメッセージ	アジア遊學91(特集 碑石は語る)
中村	春作	琉球弧から近世思想を考える	『義經から一豊へ』	飯塚 修三	和蘭全軀内外分合圖と越祖弄筆	懷徳74	韓 立紅	石田梅岩と陸象山の世界本體論及び心性思想	國學院大學紀要44
疋田	啓佑	韓國文集叢刊解題(11)	中國哲學叢集31・32	鶴飼 尙代	崎門學と「空儀」―中村習齋の家塾にて	『中國學の十字路』	韓 立紅	石田梅岩と陸象山との認識論に關する比較	國學院雜誌107
古畑	徹	廣開土王碑から東アジア國際情勢を讀む―碑文の「讀者」についての考察	アジア遊學91(特集 碑石は語る)	海老 澤衷	村の水利からみたバリ・劇場國家と日本の近代社會	『アジア地域文化學の構築』	岸田 知子	内藤湖南と西村天徳―それぞれの懷徳堂	『中國學の十字路』
李	成市	東アジアからみた高句麗の文明史的位相	『アジア地域文化學の發展』	榎本 涉	明州に來た平家の使僧	『義經から一豊へ』	岸田 知子	東洋の學藝―西成齋の書―その「個性」と「普遍性」について	『中國學の十字路』
李	成市	漢字受容と文字地域文化	『アジア地域文化學の構築』	遠藤 隆俊	土佐の漢籍と東アジア海域交流	『義經から一豊へ』	岸本 三次	東洋の學藝―西成齋の書―その「個性」と「普遍性」について	東洋文化96
十、日 本				大橋 一章	朝佛敎美術の傳播と受容	『アジア地域文化學の構築』			

久米 裕子	中井履軒の『論語』 一考察―『論語逢原』 「學而篇」を中心	『中國學の十字路』	坂田 進一	柴野栗山琴系譜 (2)	斯文114	園田 英弘	森有禮の「封建」・ 「郡縣」論	『封建』・「郡縣」 再考』
藏中しのぶ	藥師寺「佛足石記」 所引「西域傳」攷	東洋研究161	坂本 頼之	東洋の學藝・日本 に於ける「韓非子」 注釋の研究	東洋文化96	高橋 忠彦	榮西から利休へ	『義經から一豊 へ』
小島 毅	朱子學事始	『義經から一豊 へ』	柴田 篤	楠本家三代の家學 と退溪學	中國哲學叢刊31・ 32	高橋龍三郎	廣域文明と地域文 化―彌生社會の發 展と東アジア世界	『アジア地域文 化學の構築』
小坂 眞一	六壬式占の十二籌 法と陰陽道(1) 神崇の指方の諸社 の占定占を巡って	東洋研究159	島尾 新	中國美術の幻影	『義經から一豊 へ』	武田 耕一	探訪佐賀の漢學― 佐賀藩弘道館	新しい漢字漢文 教育43
小林 昭夫	東洋の學藝 幸田 露伴の『鬘考』を 讀む	東洋文化97	清水 信子	錦城の「大學」講 義とその聞書につ いて―伊藤忠信書 て資料を中心とし	東洋文化97	竹村 英二	東洋の學藝―川路 聖謨と佐藤一齋の 考察を中心に	東洋文化96
小林 和彦	泊園書院の傳統― 泊園學と藤澤南嶽・ 石濱純太郎を通し ての素描	泊園45	清水 則夫	山崎闇齋の聖人觀	東洋の思想と宗 教23	田尻祐一郎	「民の父母」小考	『封建』・「郡縣」 再考』
近藤 正則	佐藤一齋の『哀敬 編』―自葬・自祭 の模索	儀禮文化37	清水 徹	東洋の學藝・伊藤 仁齋における『易』 觀	東洋文化96	寺門日出男	中井履軒『論語逢 原』の特徴につい て	『中國學の十字 路』
近藤 正則	佐藤一齋の思想― 人はなぜ學び続け るのか	長良アカデミア 9	謝 建明	儒家文化在日本的 傳播及其整合	立命館文學592	田邊壽美枝	繪馬に残された數 學文化―和算の算 額奉納	アジア遊學91 (特集 碑石は語 る)
齋藤 正和	講演・齋藤拙堂の 師友と昌平覺	斯文114	子 東海林亞矢	中宮大饗と拜禮	史學雜誌115―12	張 惟綜	吉田松陰の實踐思 想	哲學・思想論叢 24
佐藤 信一	東洋の學藝・菅原 道眞と藤原佐世	東洋文化96	新川登龜男	漢字受容にみる日 本列島の地域文化	『アジア地域文 化學の構築』	張 文朝	荻生徂徠の詩經觀 について	中國哲學叢刊31・ 32
佐野 大介	並河寒泉『辨怪』 翻刻(2)	懷徳堂センター 報2006	末木文美士	榮西はどのように 禪を傳えたか?	『義經から一豊 へ』	土田健次郎	講演・朱子學と神 道	皇學館大學神道 研究所紀要22
佐野 大介	中井履軒「錫類記」 及び孝女はつ關連 文獻について	懷徳堂センター 報2006	靜 慈圓	『三教指歸』にみ られる空海の佛教 觀	『中國學の十字 路』	陶 徳民	内藤湖南における 進歩史觀の形成― 章學誠『文史通義』 への共鳴	アジア遊學93 (特集 漢籍と日 本人)
佐野 大介	中井履軒「錫類記」 及び孝女はつ關連 文獻について	懷徳堂センター 報2006	曾田 三郎	清末の立憲改革と 大熊重信の「封建」 論	『封建』・「郡縣」 再考』			

中村春作 市來津田彦 田尻祐一 前田勉	課題としての訓讀	大阪市立大學東洋史論叢別冊特集號(文獻學資料)の新たな可能性)	福田 殖	春日潛庵による『職山人譜』『王心齋全集』の出版をめぐる(春日潛庵特集)	陽明學 18	片岡 龍	江戸儒學研究の課題『近世儒學研究の方法と課題』
中山 富廣	近世日本の公儀領主制と封建・郡縣制論	『封建』・『郡縣』再考』	藤井 倫明	日本における理學工本研究の回顧	中國哲學論叢 31・32	保立 道久	「儒家神道」研究の成果と課題、そして展望
橋本 昭彦	講演・武士の出世と學校生活―昌平坂學問所日記を讀む	斯文 114	藤居 嶽人	『論語逢原』に見える「習」「蔽」の語を中心に	懷徳 74	矢崎 浩之	西村天因と泊園書院と―藤澤南嶽編『論語纂纂』への天因書入れをめぐる
蜂屋 邦夫	『儀禮』鄭玄注と服部宇之吉の『儀禮鄭注補注』	『兩漢における易と三禮』	堀川 貴司	中井履軒の「權」の思想	『中國學の十字路』	矢羽野隆男	木の魂と「小國寡民」―「製紙王」高島菊次郎と中國古典
濱 久雄	山田方谷の藩政改革とその思想的背景	東洋研究 159	松田宏一郎	近代日本における「封建」・「自治」・「公共心」のイデオロギー的結合	『封建』・『郡縣』再考』	山口 謠司	陰陽道の宗教的特質
濱 久雄	荻生徂徠の易學思想	東洋研究 161	前川 正名	『若州良民傳』の編集意圖について	『中國學の十字路』	山下 克明	陰陽道關連史料の傳存狀況
濱田 正美	湖南・樸學・「内」と「外」(特集)歴史學の現在(2006)	史林 89-1	前田 勉	日本における封建・郡縣論―近世日本のふたつの論點	『封建』・『郡縣』再考』	山下 克明	熊野藩社會の實施と小西惟冲
疋田 啓佑	春日潛庵と歴史觀(春日潛庵特集)	陽明學 18	益子 勝	江戸時代の八卦の占法と版本について	東方宗教 107	湯淺 邦弘	懷徳堂の笈笥架間―中國古禮の受容と展開
肱岡 泰典	皆川淇園の「孝」について	『中國學の十字路』	松本 知己	寶地房證眞の斷惑論	東洋の思想と宗教 23	湯淺 邦弘	懷徳堂の印の研究
深澤 一幸	内藤湖南は日本政府のスパイだ	『中國學の十字路』	村山 吉廣	譯註中村敬字撰文『著作秋坪墓碑銘』の解題並びに譯註	斯文 114	湯城 吉信	中井履軒天文曆法時法關係資料
深谷 克己	東アジア法文明の教論支配―近世日本を中心に	『アジア地域文化學の發展』	村山 吉廣	探訪栃木の漢學	新しい漢字漢文教育 42	湯城 吉信	「專言」「偏言」から「泛言」「專言」へ―中井履軒による朱子學用語の換骨奪胎

吉田 公平 鈴木無隱の「河井繼之助言行録」について

山口 謠司 大東文化大學圖書類分類目録(書部)附録分類目録

伊藤 淳史 Book Review 雲岡石窟寺院研究の新展開―岡村秀典編『雲岡石窟遺物編』

吉田 公平 春日潜庵の誠意説前史(春日潜庵特集)

山口 謠司 目録大東文化大學圖書類分類目録(書部)附録分類目録

上野 洋子 書評・陳桐生著『孔子詩論』研究(上)

吉田 公平 盤珪の不生禪と王陽明の良知心學

梅川 純代 第三回「道教與現代」國際會議の報告

梅川 純代 書評・大澤正昭著『唐宋時代の家族・婚姻・女性―婦(つま)は強く』

吉田 公平 『正堂先生古稀壽言集』と「桂島往訪記」について

吉田 公平 懷德堂關係研究文獻提要(23)

大島 立子 書評・新刊紹介 游子安著『善與人同―明清以來的慈善與教化』

吉田 公平 廣告『武俠世界』の押川春浪

吉田 公平 懷德堂關係研究文獻提要(23)

緒方 賢一 書評・大勢隆郎氏の歴史研究に見られる五つの致命的缺陷

劉 樂賢/森 和 出土數術文獻と日本の陰陽道文獻

有馬 卓也 書評・出土資料研究―次のステップへ―淺野裕一編『古代思想史と郭店楚簡』

小澤 賢二 書評・大淵忍爾著『中國人の宗教儀禮・道教篇』

劉 玉才/紺野 達也 日本所藏『四庫全書』零本雜考

有馬 卓也 書評・坂元ひろ子著『中國民族主義の神話―人種・身體・ジェンダー』

垣内 智之 座談會―先學を語る―西嶋定生博士公含 西嶋定生博士略年譜・著作目録

劉 權敏 日本古代における天命思想の受容―祥瑞思想の和風化

池田 温 Book Review 敦煌學の新展開―張弓主編『敦煌典籍與唐五代歷史文化』(上・下)

小澤 賢二 書評・田中麻紗巳著『後漢思想の探究』

鷺野 正明 丹羽思亭の學問と「赤穂四十八士論」

池田 温 史學雜誌 115-118

川勝 守他 書評・中村種子、藤次郎、マリア・サキム著『癒す力をさぐる―東の醫學と西の醫學』

十一、書誌學

石岡 浩 宋版『漢書』の文字の異同について

石田 秀實 東方 308

神塚 淑子 『二〇〇六道教文化國際學術研討會』報告記

東方 111

東方 43

東方 108

小島 毅	書評・伊東貴之「思想としての中國近世」	歴史學研究 815	眞柳 孝誠	第十一回國際東アジア科學史會議(内外東方學界消息(10))	東方學 111	瀧田 豪	書評・宗族の政治學―阮雲星の宗族と政治文化によせて	創文 483
小林 義廣	批評と紹介 阮雲星「中國の宗族と政治文化」	名古屋大學東洋史研究報告 30	須江 隆	石に託されたメッセージ	アジア遊學91(特集 碑石は語る)	田中 和夫	書評・野間文史著「十三經注疏の研究」その語法と傳承の形	人文社會科學論叢 15
合山 究	Book Review 中國の書論研究における書期的業績―熊秉明著・河内利治譯「中國書論の體系」	東方 305	杉本 憲司	書評・原宗子著「農本」主義と「黄土」の發生―古代中國の開発と環境?	2 東洋史研究 65―	中嶋 隆藏	追悼・金谷治先生のご逝去を悼む	東方學 112
近藤 正則	清音抄 東アジアの眞情―藤塚鄰博士コレクションの歸韓	東洋文化 97	鈴木 眞	Book Review 密度の濃い歴史の概説書―岡田英弘・神田信夫・松村潤著「森羅城の榮光―明・清全史」	東方 310	橋本 昭典	〈幻想の江南／迷妄の群邪〉考―風景の情理的な理解とそのリアリティ―臺灣における明史研究と教育(内外東方學界消息(11))	奈良教育大學國文 29
窪 徳忠	書評・坂出祥伸著「道教とはなにか」	東方宗教 108	砂山 稔	海外學界動向 I AHR World 大會道教パネル報告	東方宗教 106	濱島 敦俊	書評・森紀子著「轉換期における中國儒教運動」	東方學 111
齋藤 明	第十四回國際佛教學會に出席して(内外東方學界消息(10))	東方學 111	關村 博道	海外の荀子研究に於ける多彩な問題意識―「荀子研究の回顧與開創」國際學術研討會に参加報告	中國哲學 34	林 文孝	書評・森紀子著「轉換期における中國儒教運動」	史學雜誌 115―4
佐藤 將之	國際學術交流推進の方法としての研究プロジェクト―「荀子研究の回顧と開創」プロジェクトを企畫・運営して	中國哲學 34	關村 博道	中國湖南省長沙學術調查報告	中國研究集刊 41	町田 三郎	金谷治先生を偲んで	東方宗教 108
坂内 榮夫	書評・新刊紹介 中嶋隆藏著「雲笈七籤の基礎的研究」	東方宗教 107	戦國楚簡研究會	中國研究集刊 41	別冊	三浦 秀一	業績と學風 中嶋隆藏教授の業績と學風	文化 69
柴田 篤	楠本正繼著「朱子の政事と其思想」	32 中國哲學叢書 31・	戦國楚簡研究會	「新出楚簡國際學術研討會」参加記	中國研究集刊 41	源 了圓	追悼・金谷さんの日本研究	東方學 112
			竹内 弘行	書評・森紀子著「轉換期における中國儒教運動」	4 東洋史研究 64―	森田 憲司	「石刻熱」から二〇年	アジア遊學91(特集 碑石は語る)
				八木 春生	書評・岡村秀典編「雲岡石窟遺物篇」(京都大學人文科學研究所研究報告)			史林 89―5

學界展望(哲學) (二〇〇六年一月〜十二月)

山田 明廣	國際學界動向「天 臺山暨浙江區域道 教國際學術研討會 參加報告記」	東方宗教 107	吉本 道雅	紹介・禮縣秦西垂 文化研究會・禮縣 博物館編『秦西垂 文化論集』	4	東洋史研究 64
山田 勝芳	Book Review 漢 （唐皇帝祭祀研究 に確固とした基礎 を與えた研究）金 子修一著「中國古 代皇帝祭祀の研究」	東方 307	渡邊 健哉	學界展望・近年の 元代科擧研究につ いて	4	集刊東洋學 96
山田 利明	Book Review 「氣の宗教」の本 質―坂出祥伸著 『道教とはなにか』	東方 303	アングラ シヨッテン ハンマー・ 吉田眞弓譯	墓誌銘研究におけ る石刻の重要性	4	アジア遊學 91 (特集 碑石は語 る)
山田 利明	書評・丸山宏著 『道教儀禮文書の 歴史的研究』	東方宗教 108	小南 一郎教授著作 目録	原孝治教授近影・ 略年譜・研究歴 (原教授退休記念 號)	4	大東文化大學漢 學會誌 45
山里 純一	書評・新刊紹介 三浦國雄著『風水・ 曆・陰陽師―中國 文化の邊緣として の沖繩』	東方宗教 107				
山根 直生	文字をのこす人、 みる人、語る人― 南通市狼山の磨崖 文をたずねて	アジア遊學 91 (特集 碑石は語 る)				
吉田 篤志	青銅器の郷を尋ね て―陝西寶鶏調査 報告	大東文化大學漢 學會誌 45				
吉田 隆英	書評・新刊紹介 川野明正著『神像 呪符―甲馬子』集 成・中國雲南省漢 族・白族民間信仰 誌』	東方宗教 107				

學界展望 (哲學)

はじめに

本年の目録には、單行本約一九〇點(再刊書も一部含む)、論文約六三〇點があがった。昨年と同様のことを述べるが、日本國內の分野区分でいえば「史學」「宗教學」など、關連する分野のものもやや廣く採録している。どこまで採るかの判断によってこの點數は上下する。採録の範圍については今のところ擔當者に任されているが、「東洋學文獻類目」との關係も含めて、一度検討すべき課題であろう。以下、單行本を中心として「(中國)哲學」の立場から二〇〇六年度(一月〜十二月)の動向をみていく。單行本も、一般書、教科書的なものから研究書まで多様だが、「學界展望」という場なので、ここでは研究論集も含めて研究書、および先端研究を少しく一般向けにした準研究書を中心にとりあげる。ただし論評というよりは、相對的にかんりの數の書にふれる機會に役目上めぐまれた立場から、前年と同じく、こういう書が刊行されているということを中心として、一言紹介的にコメントするにとどめる。かつ紙幅の關係もあり、論文も含めれば膨大多様な研究の一角に、擔當者の興味に向くままにふれただけのものであることをお断りしておく。

なお、本學界展望コメント(哲學・文學・語學)は、原案完成の段階で出版委員會において検討會をおこなっている。本年はその席上で、論及した單行

本について哲學部門と文學部門とで五點の重複があることが判明した。分野で言えば「文學」分野の研究のものを「哲學」部門でも研究に重要として言及したものが四點、逆に分野では哲學・思想側に屬する研究者のものを「文學」部門でも紹介したものが一點である。これを調整することとし、前者では、研究對象が思想問題に傾くということで一點を「哲學」で紹介し、他の三點は、研究の方法がやはり文學に傾くとみられるので「文學」にもどして紹介した。思想のものを「文學」でとりあげた一點は、その題目からして文學研究の會員が關心を持つてであろうということ、で、「文學」で紹介することとした。以上については、主として本「哲學」部門コメントでその都度適宜ふれることとする。

さて、目録からその單行本の傾向をみると、本年(〇六年)は、①、「哲學」・思想學に限らず各分野の、近二十年ほどの研究状況分析とか、研究入門とか、廣い意味での研究論に關するものが目についた。また、②、二十一世紀COE研究の第一次群の研究が後半期間に入ったこともあり、そのシンポジウムの成果や種々の共同研究をまとめた書物が、史學が主となったものだが、多く出されている。以下、大きくは「總記」、及び古い時代と新しい時代とに分け、①の研究論の書の輩出については、この「はじめに」でふれ、②の大型共同研究に關わる問題については、「總記」でふれることとした。

その、研究状況分析とか研究入門書の輩出という

學界展望(哲學) 二〇〇六年一月〜十二月)

のは、「哲學・思想(史)學關係では、道教研究のあり方について堀池信夫、砂山稔編『道教研究の最先端』(〇五年第一九回國際宗教學宗敎史會議世界大會道敎バネル報告を基礎とした論集)が、近世儒敎について日本と韓國の研究状況解説も含めた土田健次郎編『近世儒學研究の方法と課題』(二〇〇〇年)〇五年早稲田大學プロジェクト研究所の近世儒學研究所の報告書)が、佛敎研究について岡部和雄、田中良昭編『中國佛敎研究入門』と、田中良昭編『禪學研究入門(第二版)』が出され、いわゆる三敎各々に關して近年の研究状況の紹介、検討の書が作られ、また、わが「哲學」・思想(史)學研究を遂行する前提的基礎となる史學分野について礪波護、岸本美緒、杉山正明編『中國歴史研究入門』、および飯島涉、田中比呂志編『21世紀の中國近現代史研究を求めて』という非常に有用な兩書が出版されて、たまたまこの一年で、諸分野の八十年代頃以降の研究動向を望見できるものが出そろったことをいう。加えて、資料讀解技法としての漢文訓讀法とその周邊の問題に關しても、個別分野に特化したものだが、池田溫編『日本古代史を學ぶための漢文入門』(昨年の目録に收載したが、奥書は本年刊行であった。請宥恕)、浦山きか『漢文で讀む『靈樞』―基礎から應用まで』といった、初學者に實用的な知識と訓練のすじみちを親切に示す秀逸なものが出されている。

右に「たまたま」と言ったが、こうしたものが集中して刊行されるのは、單なる偶然ではなく、研究

の現代的今日的状況(企畫段階の特點を推測すると、およそは二〇〇〇年前後)、その基底にある研究環境の八十年代頃以降の大幅な變化を反映したものである。

すなわち、第一に、八十年代以降、中國政府が改革・開放政策をとることにより、中國社會が世界と交流を深め、自らを世界の中の中國へと變容させていった。またベルリンの壁もなくなった。その中で中國における現地調査もかなり自由化し、出土文物も含めて新資料が次から次へと公開され、研究の資料状況がこの二十年で一變した。この流れ以前には、江戸からのと近代の戦前の蓄積により、近代側からの分析としての日本の中國學研究は世界的に優位にあったという自負も一部にはあったとみられるが、その前提は成り立たなくなった。研究論の輩出というのは、過去とこの新たな資料状況とが交差するところで、過去の遺産を繼承し將來へ再編する整理が、今こそ必要であるということなのであろう。

第二に、電子化技術の波が、九〇年頃以降、研究のすべての面をおおうようになった。原稿書法が手書きからワープロへ移行することからはじまり、個人資料も電子化してストック、検索するようになり、電子メールが普及し、そしてインターネットによる諸検索と表現へと波は廣がる。昨年も述べたことだが、この波は實に様々な壁を越えていく。その結果、第一の理由とも重なるが、それまで日本にあった一國中國學的な研究意識が成り立たなくなり、研究發信で中國語、英語を共通語とする國際交流世界が否

應なく開けてきた。こうした中で、研究言語も含めて世界の中國學として日本から発信するものとしての研究のヴィジョンが、個々の研究者に求められている。研究論の書が要請されるのである。

さらに第三に、右の中國の變化とも連動するが、いわゆるバブル崩壊後、日本社會も變貌し、近年はいわゆるグローバル化の中に入っていった。人文學の特に史的研究の立場は、「今」というものを、十年、百年、數百年の複層からなるものとしてみることに、そこから得られた事實や知見を目光の流動する「今」に對峙させることでその「今」に向き合いつつ、未來を洞察しようとする。そのために、過去からの時間軸に絡みつつ資料と格闘して沈殿を待つことも、ときには必要とする。幅はあろうが、研究内容に関する評價基準の基礎は、それ以前の水準に對しての、その得られた事實や知見の射程の深さにある。しかし、日本社會が變貌する過程で、教育・研究界でも、機關の中でまた機關ごとに競争を強いられつつ、「役に立つか」という視角からの表層の「今」を中心化させる對投資費用効果的な基準の評価が前面に出てきており、研究の評価基準が迷走しているように思われる。これは日本ばかりのことではないらしい。第二の問題とも絡んで、人文學研究の意義と射程が問われている。研究論の輩出はこのような状態と無縁ではなからう。

いまさら得々と語ることでもないという意見もあるが、こうした状況が、研究環境を八十年代以前の状況から一變させており、研究論の輩出となつて

いと展望子は考える。なお、日本における今の「學知」のありようを、明治以來の、より大きな射程から反省的に捉えるのにタイムリーな企畫として、『岩波講座「帝國」日本の學知』というシリーズが、本〇六年に刊行されている。第三卷、岸本美緒編『東洋學の磁場』、第四卷、藤井省三編『東アジアの文學・言語空間』、第八卷、山室信一編『空間形成と世界認識』あたりが、研究世界に關する日本と中國の距離とあり方を展望するのに参考となる。

研究環境の以上の激變については、程度の差こそはあれ、冒頭に挙げた各書物ともおおむね意識することに史學分野の研究案内の兩書には危機意識が強い。その兩書も含めてここで冒頭の各書を紹介したいのだが、紙幅上、次に進まねばならない。一つだけ例を言うと、本展望子は宋代士大夫思想を中心に勉強しているが、宋代は種々の對抗關係の中でいわば國粹主義が高まった時代であり、ために「中國」文化世界が安定的にあるということを研究の前提にしがちである。しかし右の史學の兩書のうちの『中國歴史研究入門』第二章、杉山正明・岡本隆司「世界の中の中國史」の近年の知見からの見方などを讀むと、狹義のいわゆる「中國」社會空間とその文化世界が孤立安定的に存しているとは危うく、範圍を廣げて「東アジア」からみると、それも北、中央アジア諸地域・文化の複雑な複合的連動として存していると思われ、無自覺に考えている「中國」世界はどこにあるのかという根本的なところから捉え直すことが要請されるようである。

一、總記

さて、「總記」として、冒頭で述べたように、大型共同研究の報告書が數點出ているのでふれておきたい。すなわち、「21世紀COEプログラム研究集成」と銘うって出された早稲田大學アジア地域文化エンハンシング研究センター編『アジア地域文化學の構築』、同編『アジア地域文化學の發展』、また、類縁の長江流域文化研究所編『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』などである。「アジア地域文化叢書」として、全十冊となることである。これらは早稲田大學のCOE研究の成果として刊行されたものだが、さらに他大學のいくつかのCOEも動いており、また、本學會員も多く参加している科研費特定領域研究「東アジア海域交流と日本傳統文化の形成—寧波を焦點とする學際的創生—」も〇六年で發足二年目となり、これらの共同研究の報告がこれから續々と公刊されることが豫想される。

これらの大型共同研究は、課題設定の主旨からして、國際シンポジウムを開いたり、その報告として國際論集を刊行したりすることになる。このことは、先に述べた今日的な研究環境の下で、東アジアから世界の中國學へと研究視野を開いていく有力な契機となる。企畫が有効に動いた場合のその積極面について、今後、大いに期待したい。

そもそも大型のものに限らず、共同研究をするには、課題に關する参加者各自の確かな基礎研究が必

要である。共同研究の基礎的なものとしては、同分野、近接分野、同研究課題を持つ者が集まり、資料を共有してその解讀と分析に協力するという場合がある。こうしたものは實りがほぼ確實である。現今、多大な成果をあげている先秦出土資料關係の研究會は、こういう性質のものである。次に、同じ分野ながら異なる研究課題を持つ、あるいは同じ課題ながら若干異なる分野の者が、各人の課題の延長に共有できる研究課題を設定して行く、科研費基盤研究(B)(C)のような、數名で行ういわば普通の共同研究がある。この場合も實りがほぼねらい通りに期待できることは、右に準じよう。

しかし「大型」というと、このレベルを越えるものということになる。そこでは、自身の分野の基礎研究を元手にしつつ、異なる分野の研究思考とすりあわせをし、既存分野の發想だけからでは出てこないものを生み出したり、あるいは外國の研究者とのすりあわせをしてそれぞれの國の分野發想からは出てきにくい成果を共同のものとして固着させたりすることが要請される。ただしどうかすると、前提となる個人研究の延長に終わりがかねず、十全な實りをあげることはなかなか難しい。ましてや、研究期間終了後にもその成果を發展させることが求められる場合には、準備と報告をよほど充實させなければならぬまい。成功へ向けては、全體課題を末端までしっかり共有するしなげを充實させること、各研究グループ内で各研究員の研究思考の前提から相互に理解し、資料分析で既存の自身の處理・解讀法に引きこもら

ず、他の解讀思考を考えると、自身の解讀思考を他分野の資料に試みるとか、研究協力するときの元手の基礎研究の方法論レベルで相互に乗り入れたら討議するといったことが、新たな世界を拓くことにつながるかと思われる。ともあれ、豫想されるこうした困難を克服し、實り豊かな報告や研究成果が多數公刊されることを期待する。

さて、研究書の動向に話を向けると、昨年の福井文雅氏のものに續いて、大家の人生の節目にあたりてこれを祝う、研究上の縁者、受業生による論集が、二點刊行されている。

加地伸行博士古稀記念論集刊行會『中國學の十字路・加地伸行博士古稀記念論集』は、大阪大學名譽教授の加地伸行氏の古稀記念にあたり、受業生、研究上の縁者が一同に會して作成された記念論集である。實に五十一名にもぼる關係者が論文を執筆している。卷末に「謝辭」として、「わが學の歩みを語る」というべき内容の加地氏の文章が寄せられている。標題の「中國學の十字路」というのは、加地氏の命名とのことで(湯淺邦弘氏「序」、中國哲學・文學・語學、宗教學、東洋史學、日本漢文學という廣い領域から集まり、多元的に成果を問うことを意識したものである。

中嶋先生退休記念事業會編『中國の思想世界』は、中嶋隆藏教授の東北大學定年・退休にあたり、受業生が感謝を形にあらわす意圖で記念するという、當今では古典的な企畫の論集である。本展望子も執筆者の一人なので多くを語ってはなるまいが、論題の

對象の時代で言えば、戰國時代から中華民國時代まで、諸子百家から儒教、佛教、道教や醫學、近代における文物流出問題まで、十六名の執筆者が多岐にわたる問題を豊かに論じる。

以上の兩書の執筆者の論題には、加地氏、中嶋氏兩氏それぞれのこれまでの幅廣い研究領域が、期せずして反映されている。

次いで、通時代的な研究の、右に述べた「普通」の科研費共同研究の成果としては、小林正美編『道教の齋法儀禮の思想史的研究』がある。本書は、〇二年〇六年度早稻田大學プロジェクト研究所の道教研究所で行った科研費研究、「齋醮の研究」(小林正美氏代表)の研究報告書をもとに充實させた報告研究である。四部構成をとり、「道教の齋法儀禮の成立」三編、「道教の齋法儀禮の展開」三編、「道教文物と齋法儀禮」二編、「儒佛二教と道教儀禮」二編、七名十編の論文を收載し、南朝劉宋時代に形成された天師道の儀禮を教理との關係から分析し、その儀禮の展開をたどり、現代に残る碑石、摩崖造像の調査、そして關連する唐代の佛教儀禮、趙宋時代の宮中の儒教祭祀儀禮にも及ぶ。

なお、單著として中嶋隆藏『中國の文人像』が出ているが、文學部門コメントをご覧いただきたい。

また、史學分野の研究者の書だが、稻葉一郎「中國史學史の研究」が刊行されている。「戰國諸子と歴史認識」四章、「紀傳體と編年體の成立」四章、「劉知幾と『史通』」五章、「司馬光と『資治通鑑』」五章、「地方志の發展」二章、「章學誠と『文史通義』」

五章、及び附篇、序論から成る八百頁を越える大著であり、哲學・思想（史）研究で關連する問題をとりにあげるときに大いに資するであろうものとしてふれておく。研究書ではないが、「圖說中國文明史」シリーズと「圖說・中國文化百華」シリーズという、ビジュアルな概説シリーズが刊行中であり、特に後者は、絞ったテーマについてその分野の專家が近年の様々な研究成果を圖像・寫真とともに概説、提示しており、文章だけでは分かりにくいところを目で見えるようにして、あれこれ考えるのに有用である。

二、先秦〜隋唐

郭店楚簡・上海博物館藏戰國楚簡をはじめとする出土資料の研究は、先端研究の專著・論集レベルでは一息ついて、解讀の結果の解説や、先端研究を踏まえてより廣い方向で思想總體を考える論考がいくつか出ている。

小南一郎『古代中國 天命と青銅器』もそうした論著だが、文學部門コメントで紹介する。淺野裕一『古代中國の宇宙論』は、湖北省郭店楚墓・上海博物館楚簡に含まれていた出土資料よって、道家思想の宇宙生成論の形成と展開の新しい理解を示す。さらにその宇宙論が持つ特質を、自然科學を生み出した西歐世界の自然哲學の源流と對比しつつ、中國文明が近代科學文明を創出しなかった理由を考察する。郭店楚簡や馬王堆帛書を読み解きながら、近代科學

文明の中に生きることの意味を問う大きな思考に讀者をいざなう。

澤田多喜男『黃帝四經―馬王堆漢墓帛書老子乙本卷前古佚書』は、馬王堆漢墓帛書のうちの、漢初の黃老思想として讀まれていたと推測される出土文獻である「經法」「經」「稱」「道原」の詳細な譯注。傳世文獻、中國側の研究と突き合わせを丹念におこなう。全體を、道家のようなながら法家思想の重要著作とみる（解題）。

池田知久『馬王堆出土文獻譯注叢書 老子』は、馬王堆漢墓帛書の中から公開されているものを選んで譯注する企畫の第一冊目である（全十冊豫定）。傳世老子としての王弼本老子、中國側の校注と比較對照をする。帛書全體の解説と、この帛書本老子についての解説との二點の「解説」をつけ、帛書本老子については、王弼本に代表される通行本老子の直接の原形とする。なお、その後には發掘公開された郭店楚簡の中に全部ではなくして残る三點の老子との関わりを、郭店楚墓が戰國末の下葬と推測する立場から論じた付論がつく。

次いで、主として漢代以降を対象とする研究についてふれる。先秦から漢代に關わるものだが、松田稔『山海經の比較的研究』は、文學部門コメントをご覧いただきたい。渡邊義浩編『兩漢における易と三禮』は、漢易と後漢禮學という、經學の中でも基礎的しかし難解な分野に關する、編者を代表とする科研究共同研究「兩漢儒教の研究」による二つの國際シンポジウム、「易と術數研究の現段階」（〇五年

一二月）、「兩漢における三禮の展開」（〇六年五月國際東方學者會議の報告論文、コメントをそれぞれ第一部、第二部とし、さらに理解を深めるために四編の論文を第三部「兩漢における易と三禮」として加えて成ったものである。易學、特に『京氏易傳』の解明のための計算などは本展望子には茫漠としていて難解なのだが、この易學については、現代からみて神祕的にみえる易學が合理的數理に支えられるという一體性の妙味が、また後半の禮學については第二部「討論」の、「儒教が現實の世界や政治とどのように係わってきたのか」という三浦國雄氏の言葉が、本書をたどる手がかりとなろう。

古勝隆一『中國中古の學術』は、著者の學位請求論文を基礎として改編、加筆したもので、中國の後漢末から唐代を中古と呼び、この時代に發達した注釋學に着目して學術の動向を解明した上篇「中古注釋學をめぐる學術史的背景」五章、下篇「中古注釋書研究」五章、及び序論から成る研究である。儒教の注釋ではいわゆる義疏の時代にあたるが、その學術内容もさることながら、釋奠で經書講義をすることか、佛教の講經で質問を擔當する「都講」の役割と後漢儒學における質問の風習との關係とか、講義のときの座法などの、義疏講釋における具體的な光景について、一概に佛教に由来するものとみるのではなく傳統文化との関わりからを検討する諸論が、著者の主意をはずしているやも知れぬが、新鮮であった。山城喜憲『河上公章句「老子道德經」の研究 慶長古活字版を基礎とした本文系統の考索』は、慶應

義塾大學斯道文庫に籍を置く著者が、『老子』傳世

テキストとして王弼本文及び王弼注に並ぶ重要テキストである河上公本『老子』本文と河上公注文を、

日本傳世本に併せて中國宋版本、明刊本、スタインとペリオ敦煌文書等により整理し、河上公本の多様性を検討した、九五〇頁を越える大著である。慶長古活字版が、宋版系統ではなく唐古鈔本系統の本が展開したものであり、現存傳世本の中では最も準據するに足ることを考證し論じる。「各論」として調査による日本傳本の現状の詳細な解説がつき、河上公本及びその注を實際に研究する場合に非常に有用なものとなろう。

史學分野の研究者の著作だが、哲學・思想(史)研究に資すると思われるものとして、金子修一『中國古代の皇帝祭祀の研究』がある。本書は、漢から唐に至る皇帝祭祀、即位儀禮の實施様態を事細かに史料から抽出しつつ、その運用と變容を検討し、哲學・思想(史)側から王朝統治政治思想や皇帝觀念等の考察をする場合の基礎となるものとなる。

本節の最後に、一般向けというよりは「研究」というのにふさわしい貴重な譯注として、岩本憲司『春秋左氏傳杜預集解 下』、渡邊義浩主編『全譯後漢書第十六冊 列傳(六)』、唐代語錄研究班編『神會の語錄 壇語』をあげておきたい。これらはいずれも、今後の研究の基礎として生かされるものとなるであろう。

三、宋金元と近現代

時代を下った宋以降では、學位請求論文を整備した重要な論著が多数刊行されている。

小路口聰『即今自立』の哲學—陸九淵心學再考—は、實存的意味での「今」を「生」學びの現場とせよと陸九淵が語った「即今自立」という本書タイトルに、朱熹の論敵として思想史に登場する陸九淵思想の核心を見出し、序章、終章および「陸九淵と朱熹」「陸九淵の朱子學批判」「即今自立」の哲學」という三部構成により、特にその門人への語り方とその内容、またその「朱子學」批判の立場に焦点を絞りつつ、陸九淵心學について縦横に説く。

というだけなら謹嚴な通常の研究書のようにだが、本書の刊行にあたり著者は、宋明思想について、「今、我々に必要なのは、(中略)自らの〈生〉の現場に即して、その哲學を捉え直し、捉え返して、自己の〈生〉を、我々の〈生〉の現場としての〈今〉を、實驗臺として、その有効性と可能性とを吟味検証しつつ、そこから〈今〉を生きる智慧を學びとり、後世に引き継いでいくことにあるのではないだろうか(はしがき)と言ひ、宋明思想の「哲學」を「現代に蘇らせるための研究も、これからは必要なのではないだろうか(同)と述べて、「研究」という行為の意味を學界に尖鋭に問いかける。この問いかけは、近世思想を研究する多くの者の琴線に響く提起でもあろう。このように研究成果を現代に引きあてようとする場合、資料を解讀するときにとかく現代から

の關心によって読み込み過ぎがちにもなる。しかし著者は本書の刊行に先立ち、『陸象山語錄』精讀』という陸の語録の、中國學的な調べの技法を踏まえた精密な譯注を完成させ、その作業とともに本書各論文を執筆している。その丹念な讀解研究を踏まえたものとしてみた場合、本書の分析成果は、現代に「學びと」られる「〈今〉を生きる智慧」といったものとしてだけ受けとめられるよりも以上の、歴史の中の、宋代にも明代にも受けとめられた力ある陸九淵の語りの姿を開示しているように思われるが、いかがであろうか。

松本浩一『宋代の道教と民間信仰』も學位請求論文を整備したもので、道教をはじめとする道教系資料と、地方志資料とを中心に幅広く収集した文献資料を駆使して、標題の課題に迫る。著者は、「祠廟信仰、葬送儀禮、および道教呪術の各場面に焦点を當てて、民間宗教者の活動やその背景となる民間信仰、道教教團の動き、それらをめぐる國家の統制、知識人の對處などをたどり、宋代に舊中國の宗教體制が成立してくる事情を明らかにすることを目的とする」(序章)。その舊中國の宗教體制というのは、現代、われわれがみる中國宗教事情の前提となるものであるとみ、著者は、研究者としての出發時から一年に一度は臺灣の宗教調査に行くとのことであり(あとがき)、本書にその報告を掲載はしないが、宗教實態に心身をもってふれることで文献資料をリアリティーをもって解讀する姿勢を保持する。

二階堂善弘『道教・民間信仰における元帥神の變

容』も、學位請求論文を大幅に組み替え、加筆訂正したものとのこと。民間信仰の明代資料『三教源流搜神大全』にあらわれる武神の「元帥」神の神格について、道教資料、通俗文學資料と比較しつつその變容の過程を探り、併せて『三教源流搜神大全』それ自體の性格の検討も行う。「元帥」神は唐代における密教流入以後に作り出され、宋元の道教で夥しく増えつつ、明代にかけて一方では絞られつつ通俗文學に入り込んで民間信仰界で生きつつ、一方では多く廢れたとする。著者も、現在の道教・民間信仰にみられる神々の由來を説明するを大きな目的としており、その大筋の一端がここで語られた。なお、本書は學術書としては平装廉價の装丁で出されておき、「後記」でもそのことを辨じておられる。意見は多様にあり得るが、一つの見識ではある。

宮紀子『モンゴル時代の出版文化』は、文化不毛とも一見みられてきた元時代の書物出版に関する畫期的研究で、分野では文學部門の書にあたるうが、史學、哲學・思想分野にも歡迎されるであろう。序章、終章と、「モンゴル時代の『漢語』資料と繪本の登場」「大元ウルスの文化政策と出版活動」「地圖からみたモンゴル時代」の三部構成から成り、巻頭カラーアート紙及び本文中に圖版多数を組んだ七百三十頁を越える大著である。著者は、明清の中國古典文學語學世界から出發してモンゴル時代の政書資料の世界に入り、さらにモノは多数残るがなお未開拓の資料世界にふれて本研究に至ったとのことで、このモンゴル時代にはモンゴル語、パスバ文字、漢

語白話と文言といった言語問題が交錯することから、これらを交通させる表現、表記や書物が、「聖旨」から史資料、教育書や類書にいたるまで諸局面で必然的に生じることを探り、典籍のあり方からモンゴルという時代とその社會文化に迫る。哲學・思想分野に關連しては、『孝經直解』、程復心『四書章圖』や、科擧と出版問題などがとりあげられ、儒教文化が低調だったわけではないことが立證される。全書にわたって該博な調べが注や本文に書き込まれ、索引も充實する。

吉田純『清朝考證學の群像』は、從來、考證學の成果を利用することが先行し、そのものを研究對象として客體化するのに乏しかったことを反省し、その成果はきちんと押さえつつも、その擔い手の生に焦點をあわせてその精神性を描くことを企圖する。本書名と題目を同じくする學位請求論文の、「その情熱の根源を見つめて」という副題が、本書論述姿勢の核心を衝く。こうした意圖の下、本書は、閻若璩、紀昀、翁方綱、劉臺拱・汪中、戴段二王、章學誠らの人生と人との關わり、學問を描く。考證學を研究する研究者が多く特有に持つ言葉への厳しさに裏づけられた、かつわかりやすく流麗なといつてよいすぐれた現代日本語翻譯文により、引用資料に立ち現れる考證學の擔い手の生と學への情熱が的確に提示され、その企圖は充分に成功している。

以下、學位請求論文の刊行ではない、普通の研究書、準研究書にふれていきたい。

奥崎裕司編著『明清はいかなる時代であったか―

思想史論集』は、『前近代』と『近代』とのほざま、あるいは境界線上にあると言われてきた明清時代の歴史性を問い直す試み（奥崎氏「論集刊行にあたって」）として、主として儒教研究を中心に編まれた、八編の論考から成る研究論集。宋からの朱子學の展開と明代思想としての陽明學との論争の時代としての明末、それと清初思想との連續非連續、考證學の勃興をどう捉えるか、その考證學の展開と近代思想との接點の諸問題など、諸課題が政治・社會狀態の展開とも絡んで分散して連なり、「思想史」としてこの明清時代の展開を一貫した視座から見通すのは、從來きわめて困難であった。本書は、一線の手練れの論者達が、右のまさに「境界線上」の問題である明末の天主教に關する論考も含めて、この課題、非常に大きく言えば、漢代以來の儒教・儒學思想と近代の接點の問題に果敢に挑む意欲あふれる論集である。

儒教を柱とする傳統思想と近代との接點の問題を、日本の近代の動きも絡めて考えさせるのが、小林武『章炳麟と明治思潮―もう一つの近代―』である。本書は、「近代中國のナショナルリスト章炳麟の思想形成を、明治思潮との關連から探ったもの」であり、「彼の思想が哲學的にいかに形成され、そこに明治思潮がいかに關與したのか、を中心に考察」（まえがき）しようとする。中國、西洋近代、明治日本の出会いを章炳麟の心の中のみてとるといふ興味津津の課題が展開する。

西尾賢隆『中國近世における國家と禪宗』は、唐

から宋、元に至る禪佛敎の展開を社會や國家との關わりから檢討する。著者は、日本五山の僧が日中の政治、文化交流で果たした役割をかつて論じたが、その延長として軸足を中國に置いた研究である。

張翊、園田英弘編『封建・郡縣』再考―東アジア社會體制論の深層』は、中國の統治機構、行政制度をあらわす「封建」と「郡縣」という概念について、この「言葉は、傳統的東アジアの自生概念として、當時の人間の政治・社會體制への認識に對する思考の枠組を與え、また、現實の問題に取り組みながら、政治的思考と行動をなすための原動力を提供した」ものとみて（總論）、中國と日本に關する史學、社會學、政治學、思想史學の諸分野から論じる共同研究論集である。總論と「封建・郡縣概念の普遍化の試み」三編、「中國における封建・郡縣論」四編、「日本における封建・郡縣論」六編の論文からなり、中國では郡縣制の存續を基本として「封建」でその缺陷をどう補うかが議論され、「近世日本では逆に封建制の優越を前提とした議論が中心とな」って（總論）、議論の方向が異なることや、「封建」の語が西歐のヒューダリズムに對應するとみられた中で明治以降、「封建」の語が日本で果たした機能と影響なども含めて、興味深い諸問題をきわめて多角的に論じている。

韓國、中國から來日されて日本で學位を取得された方々の書物を三點紹介しておきたい。昨年も少しくふれたが、留學研究により、中國の方は内なる中國文化を外からみる視線を獲得し、韓國の方は中國

文化について日本と同じく他者でありながら同時にほとんど内でもあるという立ち位置にありながらその自身を相對化する視線を獲得し、中國を客觀視するそれぞれの視線からの研究は、日本の研究の視線を客觀化するものとしても機能しよう。

崔在穆『東アジア陽明學の展開』は、中國、韓國、日本における陽明學の展開を究明し、それを比較論的に考察する。韓國については崔鳴吉、鄭齊斗を中心とし、張維、許筠が併せて論じられる。日本については中江藤樹、大鹽中齋を主としてとりあげる。陽明學の同じテキストを讀みながら、社會のしくみも絡んで別々の方向に向かうところが興味深い。朴倍暎『儒敎と近代國家―「人倫」の日本、「道德」の韓國』は、儒敎を政治思想として使いながら、韓國と日本が異なる近代化を歩む姿を考察する。孫路易『中國思想認識における幾つかの問題』は、王陽明の「良知」、嚴復の用語、康有爲の「神」、章炳麟の「眞如」、譚嗣同の「以太」、及び成玄英の「道」といった、やや神秘的にとられる概念を論題とし、中國哲學が直覺的という見方に對して、これらの語の中に論理的思考があることを、日本と中國の研究を廣く参照しつつ考察しようとする。

本年は古い時代に限らず近世以降でも、史學分野關係で思想研究と重なる論著が多く刊行されており、以下、簡略にふれておく。衣川強『宋代官僚社會史研究』には、「官僚と俸給―制度と生活」といった重要な研究が含まれるのみならず、朱熹に關する「官僚朱熹―朱子小傳」、南宋思想・文學界に名高い

呂祖謙に關わる「宋代の名族―河南呂氏の場合」などを收載し、必讀の書である。家族・親族とか法觀念の社會史的研究に關する共同研究の成果報告や論集として、平田茂樹、遠藤隆俊、岡元司編『宋代社會の空間とコミュニケーション』、宋代史研究會編『宋代の長江流域―社會經濟史の視點から（宋代史研究會研究報告第八集）』、大島立子編『宋―清代の法と地域社會』などが出ており、思想文化、特に士大夫思想研究の基礎認識に資する論考を多く含む。

研究的譯注としては、非常に特殊な分野だが、敷内清、中山茂『授時曆 譯注と研究』が刊行されている。六十年代の譯注研究會と〇三年の成果を併せた貴重なものであり、この曆の採用の理由付けをす、思想文化研究にも關わる「授時曆議」部分の詳細な解説研究が興味深い。かつて山田慶兒『授時曆の道』（一九八〇年）が論じた諸問題の中心資料が、科學史、曆學研究の立場からここに譯出開示されたわけである。なお、思想研究でも参照されるべき、算文生、野村鮎子『四庫提要南宋五十家研究』については、文學部門の紹介コメントをご覧いただきたい。

四、その他

以上、研究書を中心に二〇〇六年刊行の單行本の動向をうかがった。以下、残るその他のいくつかの問題について簡略にふれよう。まず、書誌學、圖書學の研究について、三點あげ

たい。工藤一郎『中國圖書文獻史攷』は、長らく東大圖書館に勤め、その後別府大、大阪學院大等で圖書館學を講じられてきた著者がおりにふれて發見した問題を論じた、古代から現代に至る書誌學の諸問題に關する研究論集である。井上進『書林の眺望―傳統中國の書物世界』は、先に『中國出版文化史』（二〇〇二年）の大著を上梓した著者の眼識による、中國の書物と日本の漢籍についての研究論文、研究餘滴集である。物としての書物を扱い検討する技術が書誌學というものであるが、兩書ともに、書物に觸りそこから喚起される問題をあれこれ調べ考える喜びを伝える。

第三は、藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究（集部）』である。本書は、A4版一千三百頁を越える大著で、三十年以上にもわたり著者が日本全國をおりにふれて實地調査した朝鮮書、中國書の朝鮮刊本の書誌データ、四部分類の集部部分について整理し、圖書目録として配列した上で、各書について書誌學的検討を施したものである。朝鮮學分野の研究であるが、素人考えにも、日本にはさまざまな朝鮮刊本が大量に渡來しており、それらが日本文化の朝鮮文化認識を示す指標であること、またそれらが中國刊本、和刻本の間に入り、中國及び朝鮮の文章文化の日本への影響を考えるにあたり、きわめて重大な位置を占めることなどが思い浮かぶ。こうしたことに關わる研究には本書が必須のものであることは疑いない。教育機關である大學・大学院研究室を母體とした哲學・思想關係の學術誌の動向については、本「學

會報」第五六集「學界展望（哲學）（二〇〇三年）」に紹介があるので参照されたい。各誌とも、刊行の繼續と掲載論文・記事の水準維持とにそれぞれの工夫と苦心が推し量られる。そうした中、例として恥ずかしながら本展望子が所屬する廣島大では大學院の博士課程生（中國思想）が極端に減少しており、他機關も同様の傾向にあるやと漏れうかがう。こうした状態の中では、その編集方針を維持した上のことだが、研究室の直接の縁故者に執筆を限るのではなく、研究上のより廣い縁者による相互執筆を増加させるなどして、上質の發表の場を新進に向けて確保していくさらなる工夫が求められよう。

最後に、出版目録に據る報告でない件を二件あげる。その一だが、東方學會のニューズレター「東方學會報」No.九一に「『儒藏』日本編纂委員會の發足」という小さな記事が載った。北京大學に編纂中心が置かれ、中國・韓國・日本・ベトナムの儒學典籍を網羅するという長期的企畫が中國で〇三年以來進んでおり、〇六年にも日本にも働きかけがあり、東方學會が窓口となって受け止めたということである。これにどう關わり典籍をどう残すのが日本の學術界にとつてはよいのかを眞剣に考える必要があるようにも思われるが、本「學界展望」欄が言うべきことでもない。冒頭に述べた本「學界展望」稿檢討のため出版委員會では、〇七年十二月發行の「學會便り」において、會員の然るべき關係者によってこの企畫をひとまず説明していただくということになった。その二は、昨年ふれたことだが、日本學術振興

會科學研究費の「中國哲學」の分野枠確保の問題である。昨年とまったく同じことを言うことになり詳しくは繰り返さないが、個人研究の中心となる「基盤研究（C）」の應募件数が〇六年は三十件だったそうである。〇五年よりも若干増加したが、應募資格がある者はみな應募する努力をするというのが、やはり後に續く者に對する最低限の務めなのではあるまいか。

「學會便り」に載せられているように、この二年間の擔當期間にいく人かの會員（顧問・舊名譽會員を含む）が惜しまれつつ物故された。先に本學會理事長を務められ、學會の發足當初から學會の振興に盡力された金谷治氏もその中に入る。斯學と學會のために貢獻された先學各位のご冥福をお祈りしたい。

末尾に擔當の感想をひと言。單行本、論文ともに、その内容及び著者との距離において遠近があり、近いものは研究の前提の想像がつくが、遠いものはわかりにくい。評價という各研究の前提の把握が不可缺になり、その意味では本欄のコメントは評價の言葉ではない。本欄でできるのは、一會員がたまたま相對的に多くの作品にふれたという立場から讀者の便をはかるということであろう。また、後任の先生をしるものではないが、誰にでも書けそうな書き方が要請もされる。踏み込みにやや缺けたかと思うが、こうしたことからかかる書き方となった次第である。會員の皆様にはご海容をお願いする。

（市來津由彦）